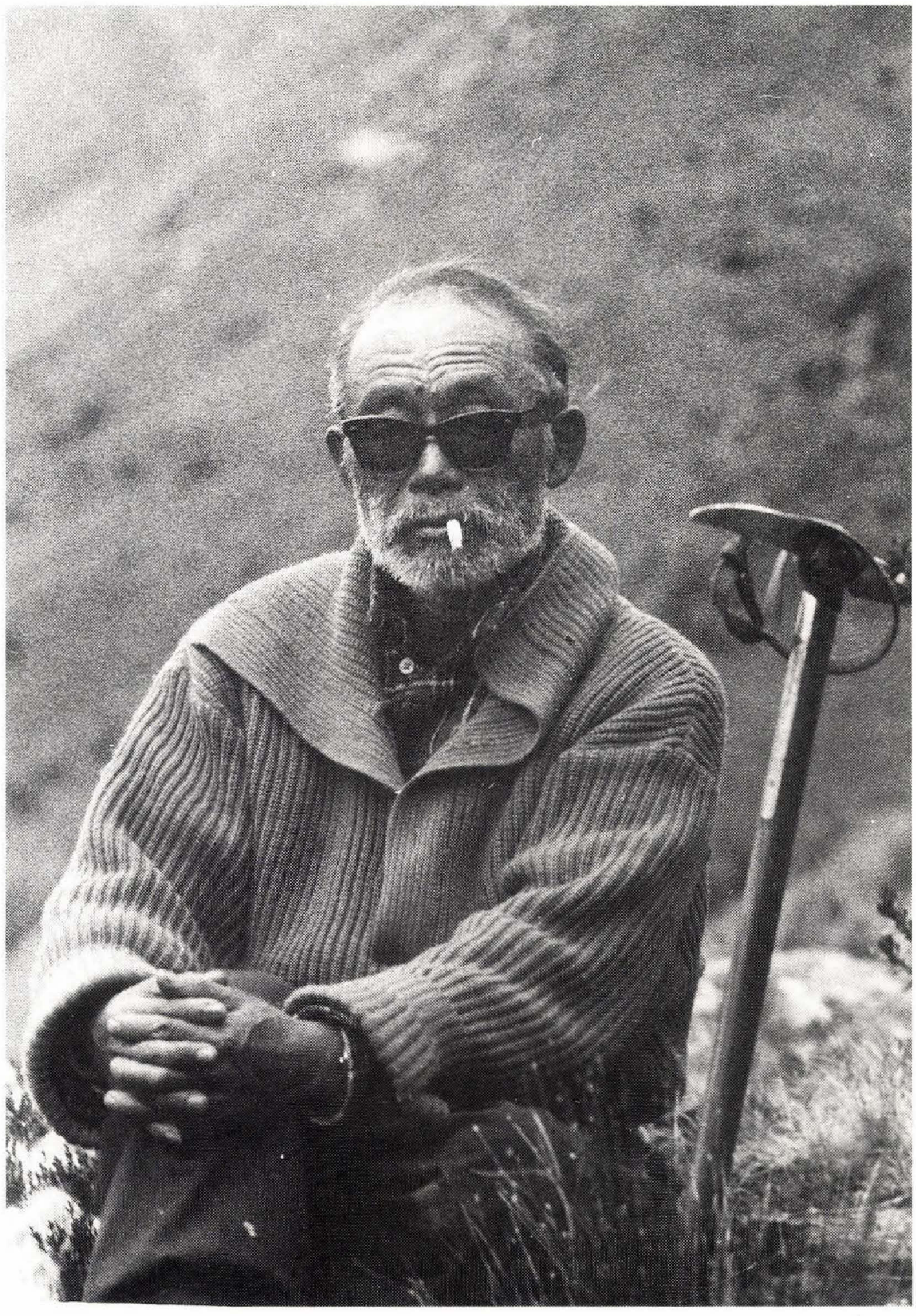
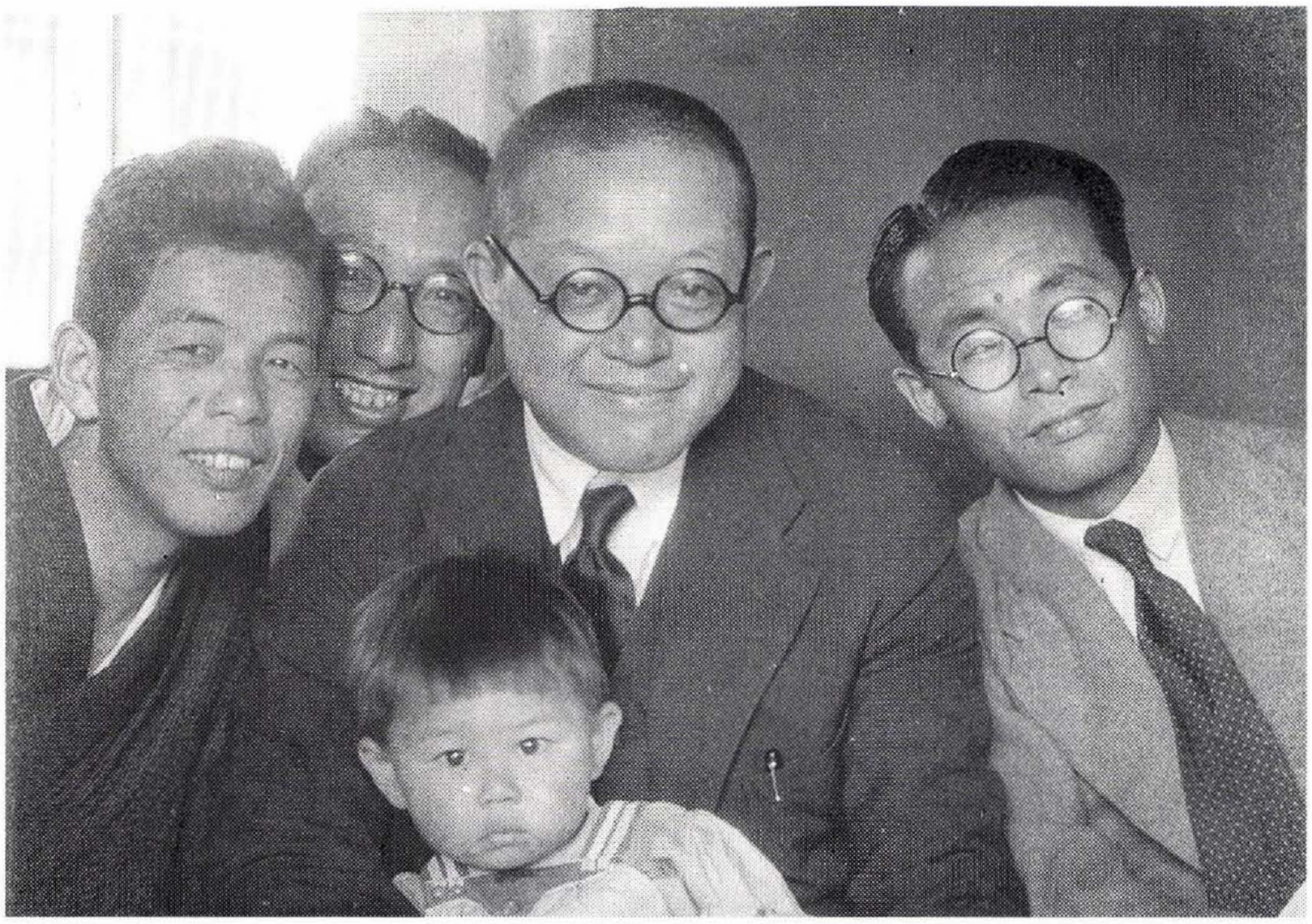
針葉樹会報

1998. 9.　第86号

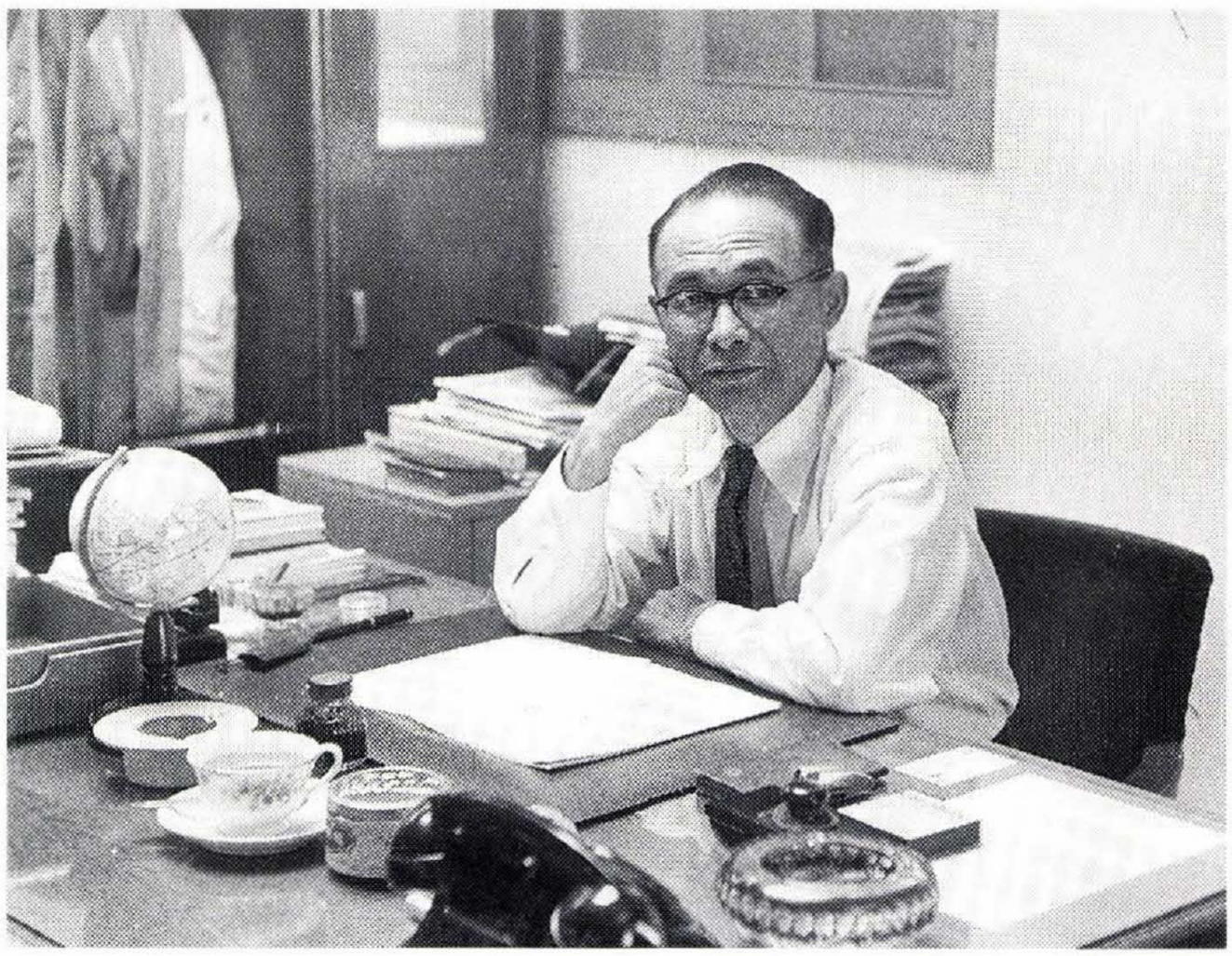
特集・吉沢一郎追悼号



吉沢さんを偲ぶ



左より、村尾金二、渡辺九郎、近藤恒雄、吉沢一郎の各氏（撮影時は不詳）。
昭和3年卒のメンバー。ペンちゃん、コンちゃん、クマさんの名物三人衆がそろった写真としては数少ないものの一枚だろう。いずれも故人となられた。



1954年（昭和29）5月、オフィスにて。

1989年（平成1）6月、如水会館にて。

発行日　1998年9月25日
発行者　針葉樹会
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第86号

《編集者代表》
中村　保
〒156-0043
東京都世田谷区松原 6-3-21
《編集委員》
倉知　敬、遠藤晶土
井草長雄、外池武司

特集・吉沢一郎追悼号〈目次〉

弔辞……中島　寛　2
熊さんのこと……堀岡　清　5
吉沢さんの想い出……佐々木　誠　6
追悼――針葉樹会報をめぐって……山本　健一郎　8

【特別寄稿】
吉沢さんをめぐる思い出……金子　民雄　10
私のヒマラヤと吉沢さん……稲田　定重　12
吉沢さんを偲ぶ……平岡　誠一郎　14
リマの吉沢一郎さん……向　一陽　16
吉沢さんの人脈……関野　吉晴　18
海外への道を開いてくれた吉沢さん……池田　常道　19
「いちろう会」はいつまでも……澤藤　美智子　21
父の思い出……吉沢　謙一　23
Ichiro Yoshizawa……Nicholas B. Clinch　25

◎プカヒルカ北峰初登頂の新聞記事　26
◎吉沢一郎氏遺稿　27
〝空いた〟後見役……丸山　則二　28
吉沢さんとゴルフ……中川　滋夫　31
吉沢さんの横顔……大賀　二郎　32
吉沢さんとのふれあい……倉知　敬　34
針葉樹会総会議事録　37
編集後記　40

欄外記事に吉沢さんの著作より　その1～4

表紙写真＝1961年、アンデス遠征中、キャラバン途上での吉沢さん

追悼　吉沢一郎氏

本会の最古会員である吉沢一郎氏は、かねて療養中のところ、去る一九九八年一一月十二日深夜、大岡山・東横病院にて御逝去された。針葉樹会は、針葉樹会報本号を同氏追悼特集号として刊行し、心から哀悼の意を表したい。

御葬儀は、一月二十六日、池上・大坊本行寺にてとりおこなわれ、本会を代表して、中島寛会員が弔辞を述べた。

本稿は、その弔文を一部追加のうえ再録したものである（編者注）。

弔辞

中島　寛（昭三十六）

吉沢一郎さん、一橋大学山岳部のOB会である針葉樹会を代表して、諸先輩をさしおいて大変僭越ですが、あえて、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

私が吉沢さんに最後にお目にかかったのは昨年の12月初めでした。軽い脳梗塞で倒れられ、入院したと伺い、アンデスの仲間で東横病院に駆けつけたのですが、もう元気を取り戻しておられ、行きつけのコーヒー屋さんが届けてくれるコーヒーをおいしそうに飲んでおられました。その後何回かお見舞いに伺った仲間からも、順調に回復しており、リハビリをめぐって主治医の先生と大喧嘩したという武勇談まで聞こえてきて、いかにも吉沢さんらしいと感心もし、あきれもし、この分なら退院も間もないと内心ホッとしておりました。それが、食べたものが気管に入ったのが原因で急逝されたことを突然知らされ、大変驚き、悲しみで一杯です。94歳のご高齢だったとはいえ、今でもやりたいことが山ほどあった吉沢さんのことですから、ご自身が一番無念だったに違いありません。

吉沢さんが登山の面でもっとも精力的に活動されたのは、大正から昭和10年代初頭にかけてでした。ご自分では「私の登山は、事の大小を問わず、要するに山旅の域を出ていない。極限に挑むなどという大それたことはやったことがない。いうならば、明治の先覚者たちの猿真似をしてきたに過ぎない」と謙遜していますが、その活躍ぶりは大変なものでした。一年の大半は山暮らし、あまり人の入っていない渓谷の沢登り、冬季はスキー登山に傾注し、幾つもの初登攀の記録を残しました。昭和5年には、剱岳東大谷左俣を初めて登り、早月尾根の上部で今日まで残る「カニのハサミ」の命名をしています。

しかし、吉沢さんの登山人生のなかで、やはり決定的な意味をもったのは昭和36年（1961年）のアンデス登山だったろうと思います。これは吉沢さんにとっても初めての海外登山でしたが、一橋大学山岳部にとっても初めての海外登山隊の派遣でした。出発できれば80％成功と言われてい

た時代でした。当然のことながら、多くの方々のご協力があってはじめてこの遠征が実現したことは言うまでもありませんが、隊長を引き受けた吉沢さんのご苦労は並大抵のものでなかったはずです。当時吉沢さんは57歳、6人の隊員は全員20代でした。しかも、9カ月に及ぶ長期間の遠征でした。吉沢さんにとっては、生意気盛りの何も分からないくせに文句ばかり言う6人の子供を引率した先生か父親の心境ではなかったかと、いつも厳格で、恐かった吉沢隊長の姿を、今にして懐かしく思い出します。幸い、アンデスに残された最後の6000m級未踏峰といわれたプカヒルカ北峰（6050m）をはじめ、全部で17峰に登頂、そのうち11峰が初登という成果を収め、かつ、未踏査だったププヤ山群もその全貌を明らかにすることができました。私個人としては、吉沢隊長と二人でカカワイチョ峰に初登し、吉沢さんに喜んでもらったことが、うれしい思い出です。

しかし、この遠征の中身をよく吟味してみると、成功のほとんどが吉沢さんのリーダーシップの賜であったことが分かります。プカヒルカを目標にできたのも、吉沢さんが長年文通してきたアメリカの登山家ニック・クリンチ氏の示唆があったからですし、ププヤ山群も吉沢さんの10年来の研究の結果、スクリーニングされたものでした。こうして、われわれは、初見参の若輩集団にもかかわらず、当時世界が注目していたアンデス登山の最先端の課題に挑戦することを通じて、かけがえのない経験を積み、その後のヒマラヤ登山への扉を開く鍵を得ることができました。

この時を契機に、吉沢さんの「一生を山と生き、山に生涯を捧げる」生活に拍車がかかり、国際的な活動もどんどん加速していきました。1968年から1972年まで日本山岳会副会長をつとめ、1968年と1977年の二回、国際山岳連盟の総会に日本代表として出席しました。また、登山家と研究者をつなぐユニークな組織として、1970年に日本ヒンズークシュ・カラコルム会議を主宰、発足させ、現在も活発な活動を続けています。1974年には、奥アマゾン探検隊本部長としてベネズエラ、コロンビア、ペルー、ボリビアを訪問、1977年には、日本山岳協会のK2登山隊総指揮として、73歳の身で、自らも5200mのベースキャンプに20日間滞在しています。

この間に吉沢さんの活動と人とのつき合いの輪は内外にどんどん広がり、登山に関する情報のアンカーマンとしても発信者としても、余人をもって代え難い役割を果たしてきました。かけがえのない国際人を失ってしまったという思いを強くしています。

吉沢さん、今、柔和に微笑んでいる遺影を前にすると、アンデス以来40年近く、山だけでなく、仕事のことや人生全般にわたってご指導いただいてきた数々が走馬燈のように浮かび、駆けめぐります。吉沢さんは、酒を全く飲まず、そのかわりヘヴィースモーカーで、すこぶるつきのコーヒー好きでした。吉沢さんはわれわれのように年齢の離れた後輩にとっては厳しく、恐い存在でしたが、先輩たちの間では、クマさん、クマさんと、親しみをこめて呼ばれていました。曲がった事が嫌いで、一本気の江戸っ子でした。格好をつけたり、飾ったりすることも不得意で、世の中の毀誉褒貶に関係なく、好きなことを好きにやって、まっしぐらに進んできた人でした。うるさがられたり、煙たがられたり、誤解を受けることも沢山あったようですが、それ以上に、多くのファンに支えられて、他の人がちょっとやそっとでは真似の出来ない素晴らしい人生を送られました。

吉沢さんは「そんな昔のことは覚えてないよ」と言われるに違いありませんが、私にとっては忘れられない出来事がありました。私がまだ若い頃、大病を患って一年半入院生活を送ったことがありましたが、その間、私の病室はいつも病院前の花屋が届けてくれる花で一杯でした。毎月一回、名

前を言わず、私宛、定期的に新しい花を届けるよう注文しにくる女性がいたそうです。最初のうちは分からなかったのですが、花と一緒に何冊かの本が届くようになり、その内容からこの送り主は吉沢さんであり、花屋に来てくれるのは奥さん（亡くなられた前夫人）以外考えられないと判断しました。しかし、いくらお礼の手紙を出しても、直接会って感謝の意を伝えても、吉沢さんは最後までとぼけて、とうとう送り主が自分であることを明かしませんでした。吉沢さんのこういう何気ない親心にこれまでどれほど励まされてきたかわかりません。

吉沢さんは多くのものをわれわれ後輩に残してくれました。その最たるものは登山に対する考え方です。吉沢さんが常に言っていたのは、「山登りは、山に登るばかりが能ではない。下りも大切だよ。下界の生活もおろそかにしてはいけないということ。それに真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考えている人のことだ。実践と研究と思索（反省）の三つを兼ね備えていなければ真の登山家とは言えない」ということの二つでした。これは正に吉沢イズムの核心であり、あるべき登山者像の三位一体論として、一橋大学山岳部の伝統として伝えられてきました。

もうひとつは、「好きは好きなりに道を極め、人のやらないことをやってみろ」ということです。アンデス遠征もそうでしたが、多くの著書、訳書を拝見すると、その言葉を自分なりにどう実践されてこられたか、よくわかります。2年程前に吉沢さんを訪ねてお話を伺った際、「吉沢さんが翻訳した本のなかで、これはやり遂げたという実感のあるものは何ですか」と聞いたところ、躊躇無く「それは何といってもジェラルド・モーガンの『ネイ・イライアス伝』だね」と答えられたので我が意を得た思いでした。吉沢さんが居なければ、ネイ・イライアスのような複雑な性格をもった優れた探検家が日本に紹介されることは無かったろうし、このような人物に着目する嗅覚は長年の蓄積に裏打ちされた吉沢さんの独壇場であったように思います。

吉沢さんは最後の最後まで旺盛な好奇心を持ち続け、読書、研究、執筆に打ち込み常にこれからやりたいこと、やるべきことを追い求めた稀有の人でした。いつもお会いするのは大岡山駅前のコーヒー店、帰りに近くの本屋に寄って注文した本を受け取り、ご自宅までお送りしたのですが、最後の時に受け取った本がエプシュタインの『宋慶齢』だったのにはびっくりしてしまいました。スペンサー・チャップマンの『ジャングル　イズニュートラル』の翻訳もほぼ完了して、近く刊行にこぎ着けたいと言っていましたし、中央アジアの国境に関する研究にも意欲を燃やしていました。驚くべきエネルギーでした。しかし、今や全てかなわぬ夢になってしまいました。吉沢さんはかねてからアンドレ・ジイドの言葉を引いて「美しく死ぬのは、さほど難しいことではない。しかし、美しく老いることは至難の業だ。どこまでやれるかな」と言っておられましたが、吉沢さん、あなたほど美しく老い、美しく亡くなられた方は滅多におられないと、若輩の立場で生意気ですが、確信しています。

吉沢さんが亡くなって、76年前に産声をあげた一橋大学山岳部の創立メンバーは一人もいなくなってしまいました。しかし、創立以来のパイオニア精神を尊ぶ伝統は、吉沢イズムも含めて、脈々と後輩に受け継がれてきました。これからもその伝統を大事に受け止め、新しい花を咲かせていくことがわれわれの責任であると考えております。

今、ここに、吉沢さんとお別れするに際し、われわれ針葉樹会員一同、吉沢さんが、これまで会を愛し、指導者として献身的に会に尽くし、かつ、日本の登山界の発展のために貢献されたことを思い起こし、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。どうか安らかにお眠りください。

熊さんのこと

堀岡　清（昭十）

私が山岳部に入ったのは予科二年になってからであった。一年が終わった昭和五年の春休みに、野沢でシュナイダー氏のスキー講習会があったので、帰省せずにそれに参加した。商大生だというので宿屋では、会社をサボって同じくこれに参加していた奥野綱重大先輩と同室にした。ここで色々と山岳部について話を聞かされて入部を誘われたので、山は全く素人だったが入ることになった。ニセコや札幌付近の山でスキーをやっていた私の雪の上の動きを見て奥野さんも誘ったのであったろう。

当時私は陸上競技部に所属していたので、夏休みの山岳部の行事に参加出来たのは、一般の縦走が終わって、磯野さんはじめ上級生達が上高地に集まってからであった。それでかけ出しの私がそれからの上級生達の行動と一緒になることになったのである。山岳部創部以来初めてという奥又白や西穂にも行くことが出来たのは私にとって全くの幸運であった。この為に翌月の針葉樹会の席上で熊さん近ちゃん達に「今年や南瓜の当り年」と言われたのは今でも忘れられない。この上高地滞在中に、牧場に居られた浦松さんを尋ねて、色々話を聞いている中に、シェンクのピッケルを取り寄せて貰うことになり、その一本を入手出来ることになったのもこの時のことからである。

月一回如水会館で開かれる針葉樹会例会は、単なる世間話が中心だったが、田舎出の私には興味深く参考になることが多く又その雰囲気が心地好く、楽しみに心待ちした会合であった。当時、予科は石神井でその寮に居った私には神田に出るのが嬉しかったのもあっただろう。私はこの針葉樹会の集まりの中から山岳部伝統の部風というものを感じた。そしてそれは吉沢熊さん、近藤近ちゃん、村尾ペンちゃん、の影響が大きかったと思っている。

私の同期の部員は安達（覚張）、中島、宮川、小橋等だが、安達、中島はホッケー部の有力選手で忙しく山岳部の仕事は頼めなかった。一時は予科の山岳部はどうなるのかと思われる状態であった。昭和七年五月に新入生懇親山行として谷川岳行きがあった。これは数少ない吉沢さんとの山行の一つだったが、参加者は熊さん、ペンちゃん始め先輩三名、本科は私を含め四名、専門部二名、予科はなし、という状態であった。私は前に部風に合わぬ者は除名してしまえとまで吉沢さんに直言されたことがあったし、又近藤さん等皆の居る前で山岳部が無くなっても仕方がない、無理して気の合わぬ者まで誘うことはない、と言われていたのだった。

其の後、望月、小谷部等有力部員も増えその心配は無くなり、再び活発な部の活動が始まった。卒業と同時に東京を離れてしまった私はこれについての感想を聞く機会はなかった。

あの髭面が熊さんの名前の出所だろうと思うのだが、私は学生時代先輩達に混じって話し合う機会が多く、皆につられて一緒になって熊さん近ちゃんと失礼な物言いとなってそれが癖となり、そうでないとどうもシックリしないのであった。御一緒した山行での特別な思い出はなく、思い出されるのは針葉樹会席上のものばかりである。後年の輝かしい業績もその御性格からのものであったろうと思うが、兎に角吉沢さんは私にとって最も印象の深い先輩の御一人であった。

吉沢さんの想い出

佐々木　誠（昭十四）

針葉樹会の新年の集まりは吉沢さんの乾杯の音頭ではじまるのが恒例であったが、今年は健康を害されてお見えにならなかった。一同ご恢復を祈って散会したのだが、その夜訃報の電話が入った。

天寿を全うされ、山と共に自在に過ごされた充実した生涯に遂に終止符を打たれた。

池上の大坊本行寺でのご葬儀は、冬には珍しい穏やかな陽ざしの中、最後のお見送りをした。

吉沢さんから自伝的回想録『山へ』をお贈りいただいたのは、私が四十年ぶりに山とスキーを再開して間もなくの事だった。読み終わって吉沢さんの山についての考え方にあらためて心酔し、爾来自らの指標として座右に置いているのだが、今ではこれが貴重なお形見になった。

この本には、私にとって最も印象深い山旅となった伊奈川遡行について、当時、吉沢さんが『山岳』（第33年第2号）に寄稿された紀行文が再録されているので、とりわけ愛着が深い。

学生最後の夏山合宿を終えた昭和十三年八月に、吉沢さんのお誘いを受けてこの山行に加えていただいた。私にご指名があったのは学生のボッカ力を買われてのことだったろう。

吉沢さんとははじめての同行、しかも入部以来、終始ご指導を受けた望月さんも一緒、中央アルプスは私には未知の山域で、それも谷歩きが主体のプランなので新鮮な魅力があり、願ってもない機会に恵まれた訳である。

入山のメンバー六名（OB吉沢・村尾・小柳・新羅・望月、学生佐々木）のうち村尾、小柳、新羅の三人組は伊奈川の途中で別れて異なるルートを辿り、当初予定していた稜線での再会を果たさぬまま、それぞれ伊那谷に下ったのだが、村尾組のその後の記録は残されていない。

六十年前のこの山行のすべては、吉沢さん独特のユーモアに富んだ文章で見事に描写されているので、ここで更に故人の想い出を綴るのはいささかためらいを感ずるのだが、とにかく入山から下山まで殆ど登山者には会わなかった静寂そのものの山域で、三夜連続星を戴いた野営を重ね、これ程時間をかけて大自然にとっぷり沈潜した山行はかつてなかった。

またこのドラマの中の主役である吉沢さんのたき火を作る時のさりげない仕草、食事準備の束の間に、次の日の経路の下見をされる身軽な動き、荒れ谷の下りに、しばしば偵察を命ぜられたが、状況に応じた的確な指示、芝居の舞台でも見ているように、谷歩きの達人の年期の入った姿が目に浮かぶ。

下山して伊那大島の吉沢さんのご親戚の家に一夜ご厄介になった。伊那谷も都市化の進んだ現在に比べれば、まことにのどかな景観であっ

昭和13年8月21日、濁沢を下る。三ノ沢岳の頂上にて、左・望月さん、右・吉沢さん。右後方は御岳。

た。あたたかいおもてなしに旅の疲れをいやし、翌朝、茗荷の子を沢山お土産に頂いて満ち足りた思いで伊那谷をあとにした。

戦傷をうけて療養中のご家族がおられたが、その後どうされたか。戦禍も既に各地に及んでいたのである。

その数年後には、次第に戦局も悪化して山どころではなくなったので、ぎりぎり幸運の山行だったと思う。

齢を重ねるに従い、急速に体力の低下を感ずる昨今だが、登る山が眺める山に、更には回想の山へと移りつつある。これからも折にふれてこの本を取り出すことになるだろう。

吉沢さんの著作から 1

雲の切れ目から木曽殿越、空木岳辺りの様子が覗へる。迚も此の元気では対岸の空木岳はおろか木曽殿越の水場までも今日の内に行きつく予算は立てられない。途中で泊るのもいいが水がなくては面白くない。どうしよう、三角点の東に五〇米も降ると広い平がある、あそこへ寝ようか。それともなどと考えてゐる時、どういふ風の吹き廻しか望月君が、クマさん濁沢はどうです、降りて見ませんか、と云ひ出した。さうだな三十分もすりゃ水のある所へは出られるだらう。兎に角谷の中へ二日寝る覚悟なら食料もザイルもあるのだからどうにかなるかも知れない。兎に角上の方だけでいゝから様子を見て来て呉れ、と又佐々木君に偵察を命じる。報告の結果大した事もないらしいといふので結局此の未知の渓谷を下る事に一決した。滝の二つや三つは覚悟の前である。

――（**編者注**）「伊奈川と中御所谷」（昭和十三年九月）より。『山岳』に発表したものが『北の山・南の山』にも所収されており、そこから転載。伊奈川遡行の帰路、こうして予定外の中御所谷濁沢を下降することになった。

追悼――針葉樹会報をめぐって

山本　健一郎（昭三十二）

吉沢一郎さんが亡くなられ、昭三会の山岳部OBは全部あの世に集合した。実は私の父親が大正十四年の専門部の卒業だから、学部の昭和三年卒とは同じ年の入学、関東大震災の後の石神井校舎の仮住まいの話も良く聞かされたし、国立に停まる電車に乗り損なって、中央線の列車で国分寺に行き、国立の校舎まで走ったなどと聞かされていたので、入部直後お目にかかった昭三会の皆さんは父親のような気がして親しみが持てた。

その吉沢さんについて何か思い出話を書けと中村君からの依頼なので引き受けたものの、意外に材料がなくて困ってしまった。山にまつわる思い出は、アンデスの隊員に任せた方が良いし、私はあの時の隊員に選ばれなかったので、その後暫くはふて腐れて吉沢さんを敬遠しても居た。だから下界での思い出もこれはと言う種がない。

それで戦前の針葉樹会報を取り出して読んでみた。三冊に製本されたこの会報、神田の古本屋で手に入れて点検したら、「芋川」の印が押してあるのを発見した。芋川さんは大変几帳面な方だったらしく、この様にして会報を保存されていたらしい。話が脇道に逸れるが、その次第を昔会報に書いたところ、磯野さんから御覧になりたいとのお電話があり、京橋の明治屋の社長室をお訪ねしたら、懐かしそうにご自分の記

録を読まれて、コピーを取りたいので暫く貸してほしいと頼まれ、何日かお貸ししした記憶がある。ところが数日して目の覚めるようなすらりとして背の高い美人が会社に現れた。だれのお客かと思い見とれていたら何と私への来客だと言われ、びっくりして出て行ったら、磯野さんの秘書が会報を返しにこられたのだった。

久し振りにこれを読み返してみると、まめに寄稿しておられるのは中川さん、吉沢さん、近藤さん、村尾さんあたりだが、吉沢さんの歯に衣着せぬ一刀両断の文章と、中川さん、村尾さんの飄々として風格の漂う文章が双璧を成している。

五年五号（昭9・6・1）にはいかにも近藤さんらしい投稿回数の調査報告がのっているが、それによると創刊以来の投稿回数ベスト5は、中川32回、吉沢30回、近藤20回、村尾17回、松木11回、矢作10回、渡辺9回、浦松8回なのに、創刊以来一度も投稿していない人がこれだけいる（全部名前が載っている）のは怪しからんとある。

それを受けて、中川孫さんが、五年八号に「投稿家列伝」と題して筆格の品評会をやっている。

その筆頭はやはり村尾さんで、そのまま引用すると

「針葉樹会員中文筆家多しと雖も氏の右に出ずる者は絶対にない。それは東郷元帥が不世出の名将であることに一点疑ふ余地がないと同程度に信じても決して過ではない。行文流麗、寄稿、随筆、漫文、その何れも行くとして佳ならざる無き希代の名文である。魚沼三山紀行は私の愛誦措かざる大文章である」とあり、

吉沢さんについては

「何といふ思い切った言方をする文章だろう。飾り気もなく誇張もない。思ふままを大胆に率直に淡々と書いているのだが不思議に引きつけられる。川柳に『下女の文あたかも話するごとく』といふのがあるが、あたかも話しするごとく書くといふことはわけもないやうで実は容易の技ではない。が氏の書いた物を読んでゐるといつも氏と話してゐるやうな気がする。氏も亦飾らざる文章家である」とあるが、これは我々の知る吉沢さんがそのまま精確に描かれていて、孫さんの目の確かさに感心する。さすがに吉沢さんも中川先輩には逆らえなかったらしく、下女あつかいされても反論していない。

そのほかにも一年二号の会員消息欄には「吉沢一郎・雑誌『山と渓谷』創刊号に雲取山に就いて寄稿す」、五年二号には「吉沢一郎氏此度、広島市紺屋町15、太平生命広島支社へ転勤なさいました」の記事が見られ、五年五号には河相薫さんが豪州から一時帰国、歓迎会を五月二十日（昭9）に開いたとの記事の後、「吉沢一郎氏、その二十日に歓迎会をせよとの御自身の厳命にも拘わらず突如ご上京を延期されました。したがって同氏の歓迎会も無期延期です」などの記事が見られ、東京を離れても誌上では大活躍しておられる。

もっと面白いのが一年五号から二度にわたって「山男と常識」という記事で、内容から見ると、吉沢さんの著書が日本山岳会の会報の書評で厳しくやっつけられたのに対する反論らしいが、

「ある山岳会の幹事で某氏の腰巾着と言はれるF氏がこの間私の著書を御丁寧に六号活字で一頁以上も費やして批評してくれた。日本一の山岳会の機関雑誌で批判されるほど価値あるものではないと思っていたのであるから、その批評が私にとって好都合でも悪都合でも身に余る光栄だとは思って居る。兎もかく有り難いと感じてゐるが、多少その後に迷惑の二文字を付け足したい様にも考へられない事はない」

なんてくだりに出合うと、本当に吉沢さんは生まれてから亡くなるまでやんちゃ坊主で通されたのだなあと嬉しくなる。この論争の結末がどうなったか知る由もないが、反論の後半の部分などもっと吉沢さんの面目躍如としていて、長くてここにご紹介できないのが残念なぐらい面白い。

あの世に全員勢揃いした昭三会は、石神井の動物園の昔に帰り、コンちゃん、ペンちゃん達が「クマさんやっと来たか、ずいぶん待たせたな」と仲良く語り合っていることだろう。 ◇

特別寄稿者紹介

吉沢さんは、皆さんご承知のとおり、本会創立以来の最長老会員として本会発展に大きく寄与されたと同時に、広く山岳界全体に貢献され、様々のかたちで登山・探検の分野にその影響を及ぼされてきた。

そのご活動の一端を記すことは、追悼の趣旨から不可欠のものと考え、針葉樹会員外の主な関係深い方々にも御寄稿をお願いした。

以下に、玉稿をお寄せ頂いた方々の簡単な紹介を記載しておきたい。

金子民雄氏

中央アジア研究の第一人者。ヘディン研究をはじめ優れた業績が数多い。碩学というにふさわしい。他人の評価には辛口の吉沢さんが手ばなしで尊敬していた。

稲田定重氏

日本ヒマラヤ協会の創設者のひとり。協会発展に吉沢さんは（情報提供者として）大きく貢献した。現在、同協会の理事長。

平岡誠一郎氏

ヒンズークシュ・カラコルム会議とK2会の事務局長的な立場で中核的役割をはたしてきた。吉沢さんの登山活動の頂点、K2登頂の快挙をともに達成した間柄である。

向一陽氏

東京外語大山岳部OB。共同通信社在勤中に隊長として奥アマゾン探検の壮挙を成し遂げた。吉沢さんとは南米を舞台に縁が深い。現在は日本の島の山々をテーマに取り組んでいる。

関野吉晴氏

いまや日本を代表する探検家。一橋大学探検部を創設。ペルー・アマゾンのインディオを対象にしたフィールドワークで脚光を浴びる。吉沢さんとは、向一陽氏同様、ペルーが接点のはじまりだった。現在、メディアがサポートしている「グレート・ジャーニー」の道半ばで、モンゴルあたりを西に向かっていることだろう。

池田常道氏

山と溪谷社の『岩と雪』編集長。創刊号より手がけ、一昨年廃刊になるまで、先鋭的な登山活動の情報発信の役割を担ってきた。その功績は大きい。吉沢さんは池田氏を海外情報の面でよきアドバイザーとして惜しみなく応援してきた。

澤藤美智子さん

吉沢さんが勤務しておられた日本団体生命の「いちろう会」の幹事。吉沢さんの個性と人柄を慕って集まった仲間の集いは心温まる。

ニコラス・B・クリンチ氏

元アメリカ山岳会会長。アンデス遠征が縁で吉沢さんとの交流がはじまった。吉沢さんと海外の登山家の付合いのなかで、クリンチ氏とは最も親交が深く、そして終生続いた。互いに活躍の舞台が南米とカラコルムという共通するところがあり、また蔵書家としてご両人とも一家をなす存在である。

（中村保　記）

吉沢さんをめぐる思い出

金子民雄
（歴史家）

吉沢一郎さんとの出会いは、たしか吉沢さんがすでに還暦を過ぎてからだったと思う。膝を交えてじっくりというものではなかったが、それでもなつかしい思い出ならいくつもあったように思う。しかし、話題といえば、いつも登山と探検に関わるものだった。

私などより年下の世代、とくにいまの若い人達は、山登りは山登り、探検は探検とはっきり割り切ってしまった人が多く、話題はそれだけ狭くなったような気がする。そういった点では吉沢さんはやはり古い世代の代表格で、登山も探検と一つに考えておられたようだった。だいたいが探検を通して未知の山の存在が分かるのであり、そんなめんどうな過程は止めにして、すぐに登山ルートにとりつきたいという発想では、旅の楽しみは半減以下になるのではないかと思う。その意味では吉沢さんはどちらをも愛しておられたようだった。

人は棺を覆ってから評価が定まるといわれるが、吉沢さんはどういう位置を占めるのであろう。登山家であり、オルガナイザーとしては十分評価されるであろうが、私には実際の登山とは別に、初期のヒマラヤや中央アジアの探検家の足跡をも楽しんでおられたように思われる。中でも英国の隠れた探検家ネイ・イライアスの伝記の翻訳を通して、この人物にすっかり惚れ込んでおられた様子だった。

なにかの席で、エリアスとイライアスとどちらの読みが正しいのですかとお尋ねすると、どちらも呼ばれていたというお話だった。

翻訳家、研究者にとっていつも頭の痛い問題は、固有名詞の発音表記である。こんな発音のことでは、インド北西部（現在のパキスタン領）にあるMurreeで、私がヤングハズバンド伝を書いていたときだったから、この土地をご存知ですかと訊ねてみた。日本では一般的にムレーといっていますがというと、あれはマリーで、自分も行ったことがあるといって、細々と説明して下さった。これは有難い助言であった。

吉沢さんと私と結び付けたのは、いつもカラコルム＝ヒンズー・クシュ会議であった。私の面白くもない話を毎々、きっと相当我慢して聞いておられたはずなのに、終わるとなんとも誉め上手なため、単純な私はころりと騙されたものだった。これが吉沢さんの本領で、最後まで登山家たちの人望を集めた理由であったにちがいない。

もうたしか二十年以上昔だったと思うが、カラコルム＝ヒンズー・クシュ会議の総会とかで、私が話をすることになった。会長が吉沢さん、副会長がたしか諏訪多栄蔵さんだった。このお二人の大先輩の間に挟まれて、私はこちこちになっていたのに、大変失礼な話なのだが、このお二人をじっくり比較対照して見られる機会があった。諏訪多さんは、たしか年齢では吉沢さんより年下でおられたはずである。しかし、このときふと危惧したように、諏訪多さんはこれから間もなく、ご病気になられたようだった。

吉沢さんは、諏訪多さんと比べるなら、ともかく声も大きく、磊落で、大道を大手を振って闊歩しているといった感じだった。が、一方の諏訪多さんは心が常に内に向かっていて、語られる話の内容も繊細で、痛々しいくらいであった。諏訪多さんは、深田久弥さんの『ヒマラヤの高峰』で体を悪くされるほどだったのに、その労力に対して十分に報われなかったことに心底嘆いておられた。諏訪多さんを見ていると、すでに心身共に燃え尽きているといった感じだった。

だからといって吉沢さんが、物事に頓着しない豪傑だったという意味ではない。実に細かいことで、私のようなずっと若輩のものにまで気を遣っておられるのが、よく分かった。この上手にとられたバランス感覚、自分をコントロールできたところに、幾つもの海外遠征を組織する上で、十分に力を発揮できたのではなかったかと思う。諏訪多さんが陰なら吉沢さんは陽であり、このことが吉沢さんがいつまでも若々しく、知的にも衰えを見せず、九十歳を過ぎてまで知的活動ができた秘訣であり、原動力だったろうと思う。

深田さんや吉沢さんからは、著書をいただいたが、諏訪多さんからはなかった。なかったというのは、諏訪多さんがほとんど本を書かなかったからだった。本造りというのはかなり強引で、見切り発車ができないと書けない。完全主義者には無理なのである。諏訪多さんのようなナイーブな方は、頭の中では本が幾冊もできていたろうに、発表ができなかったにちがいない。

吉沢さんからは、幾冊か署名入りの本をいただいた。こんな中で監修にたずさわった『コンサイス外国山名辞典』(三省堂)がある。この本はいまでも私の座右の書の一冊であるが、数年前、ミャンマー(ビルマ)の未登峰カカルポラジ峰では、この辞典が一番参考になった。一橋大学山岳部が、この山に遠征隊を出すということで、私も随分この登山の成功を期待したのであったが、なに分にもビルマ政府の煮えきらない態度や、平気でやる二股外交のようなおかしな行動で、どうやら熱心な世話人の中村保さんまで厭気がさしてしまったのでは、残念なことだった。私も一番がっかりした。

吉沢さんの話は、簡潔で、いつも楽しかった。講演もこの調子で明解だった。たしか琵琶湖畔の米原での会議のとき、すでに八十歳半ばを過ぎていたはずの吉沢さんは、ちゃんと奥さんと来られていて、元気一杯だった。そのとき、君はヴァーンベリィの本を持っているか、君に上げようと言われた。私はヴァーンベリィの本なら幾冊か持っていたが、勿論、すべてではない。ただこの洋本は現在かなり高価で、はい下さいと言えるような本ではない。私もあいまいに返事をして、この本にはふれないようにした。ところが帰京すると間もなくこの本が送られて来た。見ると『中央アジアの旅』のフランス語版のもので、私はこの版は見たことがないものだった。この本は、いまでも大切な一冊として架蔵している。

一九九六年の春に、中村保さんが『ヒマラヤの東』を出版されて、いよいよヒマラヤ北西部から北東部に、研究や登山の対象が移る一つの重要なきっかけとなった。まだヒマラヤの東には、なにか抵抗感を持つ人がいたはずであるが、時代の変化はもう抑えることができない。幸いこの出版記念会には吉沢さんも出席されて一席ぶったが、登山の主流がカラコルム=ヒンズー・クシュ一辺倒だった時代が、明らかに一つの過渡期を迎えたことを、出席者の大半の人は認識していたはずだった。しかし吉沢さん、少しは抵抗するかと思いきや、そんなそぶりはまるでないことに、私は内心驚くより外なかった。なぜなら、まだ若い人たちの中には圧倒的にカラコルムにご執心の者が多かったからである。

中国南西部の省、雲南、四川の山に自由に入れるようになったのは、まだごく最近のことにすぎない。ただいまから半世紀以上昔の戦前に、早くもミニヤコンカの遠征計画を立てていたという一橋大学山岳部の伝統が、いまようやく花を開き始めたという感慨は、知る人は知ることであろう。こんなことから吉沢さんの姿を見ているうち、ふと胸を横切ったことを、いまもよく憶えている。このときにはすでに一九三二年のアメリカ隊の登山記録『ミニヤコンカ初登頂』が、山本健一郎さんの訳で完成しており、私もその原稿のコピーをいただいていたのであったが、出版に手間取り、ようやく陽の目を見たのが一九九八年の三月、すでに吉沢さんが鬼籍に入られた後であった。このことだけが唯一の心残りであった。

私のヒマラヤと吉沢さん

稲田　定
（日本ヒマラヤ協会）

訃報を聞いたのは、日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）創立三〇年記念式典の前日だった。招請した外国代表の歓迎会ということで上京したら専務理事の山森君から「吉沢さんが亡くなった」ということを知らされた。

昨年末から入院されているということはお聞きしていたが、全く思いもしないことであった。いつものように、杖をついて多少ご不自由な足取りながらも、記念行事には必ずお出でいただけるだろうと本当に期待していたのである。

何よりも三〇年の齢を重ねることが出来たＨＡＪの足跡をご報告し、「良くやったね、これからも頑張ってくれ」という吉沢さんからの言葉が、これからの私たちの活動にどんなに励ましとなることかと、楽しみにしていたのである。

八〇年代のはじめから、吉沢さんはいつもＨＡＪの壮行会となるとご出席下され、こちらも乾杯の音頭はいつも吉沢さんにお願いしていた。酒を呑まない吉沢さんは、飲み助の気持ちが分からないのか、乾杯のコップを持って壇上に上がると、ヒマラヤのことなど長口上を述べられ、あるときなどは乾杯の発声を忘れて降壇されそうになってこちらがあわててお止めしたこともあったものである。

「君のところは良く勉強しているね」といつもおっしゃってくれ、山域研究への手掛かりをなにくれと提供していただくのが嬉しかった。ＨＡＪが八〇年代になって中国の山々に傾注するようになり、特に西南中国やチベット地域のよく知られていない地域に登山隊を送るようになってからは深い関心を寄せられ豊富な知見で過去の隊の動きや文献・資料の存在を示唆してくれた。ＨＡＪが一方のモットーとしていた「未知・未踏への挑戦」というテーマにあって、吉沢さんが蓄積され、提供されてきた膨大な研究と情報は欠くべからざるものであった。本会の活動がそれにどれほど助けられたか計り知れないものがある。一九九七年までに派遣した八一隊の登山隊、五〇近い踏査やトレッキング隊の多くに氏の提供してくれた知見やアドバイスが活用されていることをあらためて思い起こし、感謝を捧げるものである。

私にとって、吉沢さんに感謝申し上げるのは、ＨＡＪのヒマラヤだけではない。

ヒマラヤをこころざしたのは、一九六五年であった。当時、神原達、深田久弥、諏訪多栄蔵、吉沢一郎という大先達が紹介しているヒマラヤの文献をリストに作り、一度に千冊ぐらいだったと記憶しているが、書店に一括注文したことがある。何はさておき、ヒマラヤというものを知るにはまず本を読もうと思ったからである。絶版や品切れ本が多かったが、それでも四〇〇冊ぐらいが一挙に手元に集まってしまった。これを二年で読み切ろうと毎日ノルマを課した。こんなふうにしてはじまった私のヒマラヤが、実践へとステップアップしたのは、福島県山岳連盟で海外登山を目指した六〇年代後半であった。

最初のヒマラヤにしては全く大それたことであったが、未踏峰を目標においた。手元にボロボロになった吉沢一郎作図「ヒマラヤ概念図」と「カラコルム概念図」がある。また、氏が作られた「世界の山々――７０００メートル以上」のリストの未踏峰にはあちこちにマーキングがしてある。それなりの研究をしてたどりついたのが東部ヒンズークシュの七〇〇〇メートル峰ウドレンゾムであった。

ここには一橋大学による輝かしい記録が残されていた。『ロシュ・ゴル氷河の山旅』はバイブルとなった。隊長の山本健一郎氏を福島にお招

きし、氏の語りを熱い思いで聞いたものである。

この頃、日本ヒンズークシュ会議の開催が吉沢さんを中心として胎動しており、会津若松に住んでいた私は、宮森常雄氏とともにその第一回会議の事務局をつとめることになった。一九七〇年三月の開催日当日は八〇年ぶりという豪雪に見舞われ散々な目に合いながらも何とか裏磐梯での会議をこなした。この折り、猪苗代の民宿で初めて吉沢さんにお目にかかった次第だった。以後、ヒンズークシュ会議を核として吉沢さんの教えを受けていくことになる。そして、家庭の都合でヒンズークシュへの遠征を断念せざるを得なかった私のヒマラヤは、七一年からHAJにその情熱をぶつける場を見つけるにいたった。

当時、HAJはヒマラヤに関して全く新参者であり、山岳界における認知も未だしであった。それでも燃える熱意だけは持っていた。七四年から本格的な実践が開始された。その過程でヒマラヤ初心者の私などにとって、吉沢さんは、文字通りの「師」であった。つまらない質問にも快く、分け隔てなく応えてくれた。恒例の「時差年賀」に書かれる一言はいつも励ましになったものである。

吉沢さんをもって、私の、HAJのヒマラヤを育ててくれた大先達はいずれもこの世を去られた。ヒマラヤ登山の趨勢も大きく変わってきた。氏のご逝去とともに一つの時代が終焉したような感慨がする。

HAJが取り組んでいるヒマラヤに関する情報センターの確立がまだまだ不完全であることを思うにつけ、氏の存在をいまさらのように大きく感じている。

氏の恩恵を受けて育った者たちの使命として微力を尽くしていきたいと思っている。

吉沢さん、本当に有り難うございました。

私たちの歩みを見守って下さい。

吉沢さんの著作から 2

一橋へ入学すると、運動部や文化部などの勧誘ポスターがやたらにぶら下がっていた。ボートもテニスも弓もやってみたが長続きせず、結局山岳部だけが残った。生来鈍感で運動神経が鈍かったから、勝負ごとは苦手だった。山ならマイペースで歩ける。われわれは一橋山岳会の第一期生となった。十五人は集まったろうか。このころもう槙有恒さんはアイガーの東山稜を初登攀されていた。

第一回の部の山行は北アルプスの燕岳、槍ヶ岳の縦走であった。金剛杖とわらじで登った燕からの展望は素晴らしかった。ホンの目前のように槍ヶ岳の尖鋒、加賀の白山が巨鯨のごとくに、遠く雲海の上に浮かんでいた。駒草もふんづけてしまうほどに咲いていた。雄大で魅惑的な風景、新鮮で素朴で純粋な驚異であった。これでもう私の運命は決まってしまった。

――（**編者注**）「目前に迫る槍」（昭和六十年八月）より。同文は、朝日新聞「こころ」のページ編『私の転機――道を拓く』（海竜社刊）に、何人かの各界の名士の人生ストーリーと共に掲載されたものからの抜粋である。

考えてみれば燕岳は、私に山というものの よさ、素晴らしさを教えてくれたばかりでなく、いやそれどころか、私の後世を、親父やお袋が期待していたであろう方向からは丸っきり別のものに変えてしまったのである。

――（**編者注**）『山へ・わが登高記』（昭和五五年八月・文藝春秋社刊）の「山岳部に入る」から抜粋。

吉沢さんを偲ぶ

平岡　誠一郎
（K2会）

吉沢さんの山の人生で、K2登山はアンデス遠征と並んで大きな出来事だったと思う。深田久弥さん、田中栄蔵さんと創設したヒンズークシュ・カラコルム会議で生まれたこの計画は、同地域を長年研究していた吉沢さんにとって並々ならぬ思い入れがあったに違いない。これが七十三歳にして五二〇〇mのベースキャンプに二十日間滞在させた原動力だったと思う。

私が吉沢さんを思う時、このK2登山計画と切り離すことは出来ない。この計画は一九七四年金沢でのヒンズークシュ・カラコルム会議で決まり、その一カ月後の十二月、有志による第一回の打合せ会が吉沢さんのお宅で開かれた。私もその一人として出席したが、その時が吉沢さんとの本格的なお付き合いの始まりだった。それまではヒンズークシュ・カラコルム会議でお目にかかることはあっても、会議長だった吉沢さんは雲の上の人で、親しく話をすることなど殆どなかった。

この計画が動き出し、東京在住で比較的時間の取れる勤めだった私は、各方面への様々な申請や事務手続きを担当するようになり、会議長の吉沢さんのお供をすることが多くなった。そうしたなかで、決して雲の上の人ではない吉沢さんの人柄を段々と知るようになった。当時山岳関係の団体の役員の多くは、直接の関係ではないにしろ、山岳界では吉沢さんの後輩に当たる。そうした人達に実に謙虚な態度で頭を下げられていた。立場が違ったからと言ってしまえばそれまでだが、なかなか出来ることではない。中には許可を出す立場になって、そっくり返るような態度を見せる人もいたが、吉沢さん自身はその姿勢を全く変えなかった。これは吉沢さんが私によく言われた「人は皆我が師」という言葉の文字通りの実践だった。

吉沢さんは常に前向きだった。年をとると多くの人が「昔はこうだった」などと言うようになるが、吉沢さんは決してそのようなことはなかった。過去のことは聞けば教えて下さるが、自分からは昔のことなど決して言われなかった。何時もこれからどうするということばかりだった。彫刻家の平櫛田中が百歳の時、二十年分の彫刻材料の木材を買ったことがあった。吉沢さんもそれと同じように、何歳になっても日本の本はもとより海外の原書を次から次へと買われていた。数年前には風呂場にまで本が溢れ、風呂場が使えなくなるという事態になるほどだった。吉沢さんは風呂に入らなくても、体を拭くからいと少しも意に介さなかった。それらの本は山に関係するものに限らず、様々な分野に渉っていた。山に限らない多方面への関心の深さと、飽くことのない探求心には只々感心するばかりだった。

吉沢さんはまた飾らない人柄だった。日本ばかりでなく世界的な山の権威なのに、それをひけらかすようなことは全くなかった。又在野の人でもあった。権威に対して肩肘怒らせてどうこうという姿勢ではなく、組織などの役職につくのを好まれなかったのだろう。それより山の本を読み、山の仲間とヒマラヤやカラコルムの話をする方が好きだったのだと思う。だから、吉沢さんの処には年齢に関係なく大勢の人が来た。特に若い人の来訪が多かったのは、吉沢さんにもっともらしい肩書きがなく、偉そうな態度をとらない、飾らない人柄なので気楽に伺えたのだろう。K2会の若い連中なども「おじいちゃんのところへ行く」と言ってはよくお邪魔をしていた。その時吉沢さんは実に優しい配慮をされた。どうせ金がないだろうからと食事に誘わ

れたり、ご自分は飲まないのに飲ン兵衛には酒をご馳走されたり、中には小遣いを頂いた者もいたと聞く。

このような心遣いは全てに及んだ。K2の寄付集めでヤクルトに行った時のこと。担当者と同社の喫茶室で会ったが、吉沢さんはごく自然にヤクルトを注文された。無類のコーヒー好きの吉沢さんはコーヒーを頼まれるとばかり思っていた。ヤクルトへ来たのだから、ヤクルトを飲むのは当然という姿勢には頭が下がった。吉沢さんは気配りの人でもあった。

吉沢さんは強烈なカリスマ性こそなかったが、その人柄には前述したように人に親しまれ人を引き付けるものがあった。吉沢さんがK2隊の総指揮に推され、またヒンズークシュ・カラコルム会議や同研究会の会長を長く勤めて頂いたのは、その人柄によるものだった。

享年九十四歳は天寿と言えるが、まだまだ様々なことを教えて頂きたかったので本当に残念な思いだ。昨年のスキルブルム峰の遭難でK2隊隊員が四人も逝ってしまい、向こうがすっかり賑やかになったので、ふっと行く気になってしまわれたのだろうか。

吉沢さん、そちらには新貝隊長を始め十何人も隊員がいます。K2の思い出話やカラコルムやヒンズークシュについてゆっくりと話し合って下さい。

合掌

吉沢さんの著作から　3

われわれの山岳部の年報を「針葉樹」と呼び、OB会の名称を「針葉樹会」としたのは、実は私であった。それはわれわれが、奥秩父の山々と、深く親しんでいた、という理由もあるが、何という名にしようと、いろいろ考えてうちに、ある時、ふと早大山岳部部報「リュック・サック」の中に、奥秩父の記事を発見した。筆者はA氏。その記事に出てきた針葉樹という三字に眼がとまった。まてよ、そうだ、これだと思った。それから皆に相談したが、「一っちゃんに委せるよ」ということでこれに決まってしまったのである。

――（**編者注**）前出『山へ・わが登高記』の「東京商大山岳部」より。

どういうわけか忘れてしまったが、山岳部には『針葉樹』のほかに『一橋山岳部部報』というのが大正十四年からでており、第二号は昭和五年、第三が六年、第四も六年、（中略）五も六も六年で、しかもそれで終っている。これはふしぎな存在である。

さいごに針葉樹会の会報がある。これは第一号を昭和五年にだしている。つまり私たちのグループが卒業して二年目から発行をはじめていることになる。このころは一橋山岳部と針葉樹会を切りはなし、学校の山岳部員だった者が社会に出ると、自動的にOBグループの針葉樹会員になるということであったらしい。この会報には必ずしも山登りの記事だけではなく、会員の消息、短信、その時々の随想というものが載せられていったようで、会員以外のひとが読んでもわからないし、すこしもおもしろくないものである。しかしとにかくわれわれにはたいへん懐しい印刷物であった。これも第六年第四号、つまり昭和十年五月に発行された第四六号から活版刷となり、第十三年第二号（昭和十七年十月発行）すなわち通巻では九十九号まで、すくなくともその形式で発行がつづけられていた。

――（**編者注**）雑誌『山と高原』昭和三四年にシリーズで連載された各大学部報紹介の中の「『針葉樹』と一橋大学山岳部」より。創元社現代登山全集「日本の山と人」転載のものから抜粋。

リマの吉沢一郎さん

向　一陽
（奥アマゾン探検隊）

一九七三～七六年、二十余人の仲間と「奥アマゾン探検隊」を組織して、南米オリノコ川とアマゾン川の上中流域に入った。偵察を重ね、二年がかりで、未踏地帯を含む一万六千余キロをカヌーやゴムボート、徒歩で横断した。僕が勤務していた共同通信社内に派遣本部を置いてもらい、吉沢一郎さんに派遣本部長を務めていただいた。

当時、アンデス登山経験者の間で日本アンデス会議というのを組織していた。吉沢さんがその議長で、僕もこれにかかわっていた。そういう縁である。

吉沢さんが目黒の家に移られた直後のころだったように思う。準備段階でお宅を訪ねては、その後で必ず、近所の吉沢さん自慢のコーヒー店に連れて行っていただいた。

オリノコ川とアマゾン川の上流域、中流域は、赤道を挟んで南北三千数百キロに及ぶ、一連のジャングル平原である。西欧文明の進出に今はばらばらに分断されてしまったが、かつてはここに、ひとつながりの「アマゾン文明圏」があったはずだと思っていた。

その仮説の実証と冒険的行為が隊の主目的で、そのほか隊員たちはそれぞれの専門分野の研究をした。資料調べを進めている段階で、「奥アマゾン」という、この地域をひとまとめにする言葉を思いついた。

「探検」という言葉はみだりには使いたくない。先人に失礼である。当時まだ、奥アマゾンのあちこちに文明と未接触の部族がいた。問答無用で矢が飛んで来る恐れもあった。川筋は、はたして横断できるのかどうか、不明の所だらけだった。熟慮の上で、これはやはり探検そのものだなと、奥アマゾン探検隊という隊名にした。

二年がかりの横断の旅の出発点はオリノコ川中流の町カイカラである。吉沢さんは当時七一歳。炎暑の中を、僕たちの心配をよそに出発見送りに来て、「くれぐれも命を大事にな。けんかだけはするなよ。けんかをしたら私との縁を切るぞ」とさとされた。

出発を待つ日、一緒に釣りに行った。吉沢さんの竿にもピラニアが入れ食いだった。ピラニアはそこにいさえすれば、釣りの技術もへったくれもなく餌に食いついてくる。

だが吉沢さんにとっては、信じられない快挙だったようで、隊員のだれかれをつかまえては、「君、君、これ、僕が釣ったんだよ」と、目を丸くして喜んでおられた。

僕たちが川に乗り出した後、吉沢さんには別行動で奥アマゾン関連諸国の日本大使館などを回っていただいた。当時二四歳の最年少隊員がひと月間、将官付き兵卒のような感じで同行した。

その最年少「兵卒」もいまは五十歳。益子焼の窯元である。川上伸生君。先日の吉沢さんの葬儀の時、棺を一緒に見送った。

「一度、朝、起こさなかったら、ひどく怒られました。コロンビアのホテルで。僕が二日酔いで起きられなかったのです」

年に一度か二度、アマゾンの仲間で酒を飲んだりするたびに彼はその話をする。よほどこっぴどく怒られたらしい。

昼はどちらが影か日なたか、吉沢さんにぴったりくっついているのが彼の役目だった。

「夜は、吉沢さんのためにモーニングコーヒーの手配を済ましたら後は何をしてもいいということになっていたのです」。夕飯の後、酔っ払ってしまって、その手配を怠ったのである。「余計なことには口を出さない人だったんだけど」。吉

沢さんはそういうけじめに厳格だった。

「毎日の予定がびしっと決まっていた。本屋が好きでコロンビアやペルーの本屋はほとんど回られた。疲れたとも言わずよく歩かれました。ボゴダの古本屋で思いがけない山の本を見つけて、とてもうれしそうだった。夜、その日買ってきた本には全部、目を通されていたようです。ベッドわきに積んだ本には丹念にインデックスが挟んであった」

「ワラス（コルディエラ・ブランカの麓）で、以前遭難した日本人の墓参りに一緒に行って花を供えました。当時アンデスにも、ちゃんとした会のバックアップがなくて個人的に行く人が増えていて、後始末も現地任せになっていると嘆いておられました」

横断本番の二年間、奥アマゾンを見渡す扇の要の位置にあるペルーの首都リマに僕は引っ越して、家を探検隊現地本部としていた。妻と長男（当時九歳、小学三年）、長女（四歳）、二男（二歳）がここにいた。

リマ滞在の間は、「毎日みたいに、うちに見えていたわよ」と妻が言う。手料理の日本食が楽しみだったようだ。「料理、まだ下手だったのにね」

奥アマゾン横断といっても、ぶっ通しでアマゾンの奥に入っていたわけではない。探検が進み始めてからは僕は頻繁にリマに戻って原稿書きをしていた。僕の原稿と仲間の写真が隊の主要財源の一つだった。隊員たちも交代や病気の治療などの時、リマに引き揚げていた。

妻は日本から包丁だけはちゃんとした新しいのを用意していた。隊員たちが大勢引き揚げて来た時など、隊員たちを引き連れてメルカード（市場）から生きのいいでっかい魚や大きな肉の塊を仕入れてきては、その包丁で格闘していた。そういう時はリマの家はにぎやかだったが、探検初期は妻と子供たちだけで淋しかったかったようだ。

奥アマゾン横断開始は一九七四年七月初めである。七月のリマは毎日、陰うつな霧雨か曇天が続く。吉沢さんも家に来るのが楽しみだったろうが、家の幼子たちも吉沢さんの来訪を楽しみにしていたようだ。

ペルー人のお手伝いさんのスペイン語に戸惑っている末っ子を吉沢さんがよく抱っこしてくれていたと妻が言う。

「あとで吉沢さんに聞いたんだけど、千鶴（長女）がね、吉沢さんがホテルへ帰ろうして、さよならと言うと、おじちゃんもう来ないの、日本へ帰っちゃうのって、淋しそうな顔をしたんだって。吉沢さんがまた来るよって言うと、あ、あよかったって、とてもうれしそうな顔をしたんだって」

吉沢さんはこの子供たちのこともずっと気にかけてくれていて、後日地震があった時など、子供たちの名前を並べた気遣いの手紙を何度もリマの家あてにいただいている。立派な人は小事にも立派な手紙を書かれるものだということを吉沢さんに教わった。

◇

吉沢さんの著作から 4

早月尾根二六〇〇メートル、剣に至る小稜は地形としては地図にあるごとき簡単なものではないが歩いて見ればたいしたこともない。野営地から仰ぐと行手にはまず取付かねばならぬハイ松の一峰が屹立している。その後に何物が存在するかわからないがその先も眼にはかなり急に映る。早月尾根が剣に合するちょっと手前のところにケルンの積んである青白い岩峰（峰頭は二つにわかれ仰いで右手のにケルンがある。私たちはこれを仮に蟹の鋏と称んでおく）をまず登れば後は容易らしい。（中略）

これからは確実な岩場をちょっとチムニー式の中を登って先刻蟹の鋏といったケルンのある岩峰の間をちょうど北から南登りに抜けるようになる。それから剣らしい黒い岩塊の上をもはや手を使うようなところもなく一峰を越して別山尾根からのルートに合し剣の峰頭に荷を置いたのは七時五五分であった。

――（編集注）『登高記』（昭和八年刊）の「東大谷より早月尾根を経て剣へ」より。創元社現代登山全集転載のものから抜粋。

吉沢さんの人脈

関野吉晴
（探検家）

今から三〇年前、一橋大学に探検部を創設しました。右も左も分からず、社会人の山岳会に入り、早稲田大学探検部の準部員となり、一年のうち百数十日は山に登ったり、川下りをして過ごしました。そのうちにペルーアンデスの麓の水源から、アマゾン川をゴムボートで下ることになりました。ペルーやアマゾン関係の本を読みあさり、そこに行ったことのある人がいると聞くと、関西でも札幌でも飛んでいって話を聞きました。

その中で、数年前に山岳部がペルー及びボリビア・アンデスに登山隊を送りだしていることを知りました。その隊長が吉沢さんだったわけですが、早速電話したところ、お会いできることになりました。その頃、生命保険会社にお勤めだったので、そのオフィスにお伺いすることになりました。大先輩で、服装にもうるさい人と聞いていました。登山靴のままオフィスを訪れて、どやされた人もいると聞いていました。どんな怖い人かとおそるおそるオフィスを訪れたのですが、笑顔でていねいに応対していただきました。ペルーアンデスの幅広い話をおうかがいした後、日本で会ったらいい人、ペルーで訪れたらいい人に紹介状を書いていただきました。

この時に紹介していただいてお会いした人たちは、その後南米に通いつづける私にとってかけがえのない人たちばかりでした。北大山岳部OBの西村豪さん、早大岳友会OBの宮下昭さん、ワラス在住の谷川省三さんらとは今でも家族付き合いをさせていただいています。その後も、吉沢さんが派遣本部長をなさった奥アマゾン探検隊の向一陽さんをはじめ隊員の方々を紹介して頂きました。幅広い人脈をもたれた吉沢さんでしたが、その御人徳によって多くの方々に信頼されていて、紹介していただいた人たちには骨身を惜しまず面倒を見ていただきました。

私は長い間、アマゾン、アンデスに通いつづけていました。たまにご自宅をお伺いして、旅の報告をすると笑顔をたたえて私の話に耳を傾けていただきました。帰りにはいつも駅まで送っていただいて、駅近くの喫茶店でコーヒーを御馳走になりました。コーヒーをおいしそうにすする吉沢さんが印象的でした。

結婚式の披露パーティーや壮行会では何度か乾杯の音頭をとっていただきました。私は四年前からアフリカで四〇〇万年前に生まれた人類が新大陸に拡散していったルートを逆ルートで辿る旅を続けています。太古の人々の旅の再現は無理なのですが、せめて彼らが感じたであろう寒さ、暑さ、風、湿気、埃、匂いなどを感じられたらと思って、自分の脚力と腕力を使って、具体的には徒歩、カヤック、スキー、自転車などで移動しています。この旅の始めの壮行会でも吉沢さんに乾杯の音頭をとっていただきました。この時既に九〇歳でしたが、奥様とご一緒に杖をつきながらいらして下さいました。そしてあの独特の太い声で激励の言葉をいただきました。

吉沢さんは筆まめ、達筆で有名でしたが、自分の書いた本や写真集をお送りすると、必ず万年筆を使ったあの独特の太い字で、感想と批評、激励を心のこもった温かい文章で送っていただきました。また毎年、一月の下旬ごろになると、葉書にやはり万年筆の直筆で寒中の挨拶状をいただきましたが、もう頂くことができなくなり、寂しい思いが致します。

海外への道を開いてくれた吉沢さん

池田常道
（山と溪谷社）

「君は、ＡＡＪを読んでいるそうだね」

初対面の一言は、あのよくひびく声で言われた、こんな言葉だった。『岩と雪』の編集部に配属されてはじめて、渋谷にあった日本団体生命の総務部分室、すなわち吉沢さんの「お城」にうかがった時のことである。二十六年まえの一九七一（昭和四六年）、まだ冬のさなかであった。

「ＡＡＪ云々……」のひとことは、当時の編集長がわたしを紹介してくれるに際してつかった形容詞だった。入社してしばらく、資料室という地味かつ暇な職場ですごした日々は、図書の整理や山小屋、スキー場のデータ管理といった、正直いって登山に燃えて学生時代を送った身には閑職とも感じられる〝本業〟だった。そんなあいまに、書架にあるＡＡＪつまり『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』や『アルパイン・ジャーナル』、また『ヒマラヤン・ジャーナル』や『マウンテン・ワールド』を取り出しては、当時はやりだった京大式カードでヒマラヤ登山史メモをこつこつ作成していたのである。

吉沢さんのような著者がちゃんと原稿にしてくれるものを、なにも社員が手間をかけてやることはない、というのが当時の風潮だった。そんななかで、「ＡＡＪを読む」奇妙な人間が編集長の目に留まって『岩と雪』に引っ張られ、吉沢さんへの紹介の言葉になったらしい。そんな出会いを機に、毎月のように「お城」へお邪魔してはコーヒーをごちそうになり、内外の山のお話を拝聴して、用意されている一束の原稿をどさっといただいて帰るのが、わたしの仕事となっていった。

吉沢さんの言葉に相づちを打っているだけではいけないのである。もうひとつ引き出すためにこちらもその気になって、生噛りの知識の一端でも見せなければ、身のある情報は聞かせてくれない。試されているのである。山と溪谷社とは、それこそ創業以来のお付き合いだけに、山溪社員の品定めにはかなりきびしい基準を設定されていたという点には、のちのち気づかされるところが少なからずあった。

「お城」ではいろいろな登山家に紹介していただいた。たとえば高橋照、高橋善数両氏。吉沢さんは茶目っ気をだされて、「この二人は親子なんだよ」と言われ、その後しばらく、わたしは信じていたものだ。「高木（泰夫）君」や「宮森（常雄）君」の地図（ヒンズークシュやカラコルム）も、吉沢さんの紹介で『岩と雪』の折り込み付録になった。日本ヒンズー・クシュ会議やアンデス会議につれていって、登山界のお歴々に紹介してくださったのも吉沢さんである。『岩と雪』の仕事をやっていくうえで貴重な人脈が、あっという間に広がっていった。さすがに「ＡＡＪを読む奴」とは、もう言われなかった。

田村協子さんの訳したシプトンの『Land of Tempest』が『嵐の大地』として世に出たのも、吉沢さんが、すでに訳稿ができあがっていることを教えてくださったからである。山溪からシプトンの翻訳が出せるなんて、当時は想像もつかないことだった。

毎号いただいてくる、海外登山関係の原稿は長短・内容ともにさまざまだった。ひとつのテーマで書かれたもの以外は、いつも「最近の登山界の話題から」などという適当なタイトルの下にまとめて掲載されていた。それを地域別に整理して載せるようにしたのは、初対面からしばらくたってからのことだった。のちに『岩と雪』の柱になった「海外クロニクル」のはじまりである。英誌『マウンテン』との交流の端緒をつくってくださったのも吉沢さんだった。

中島寛さん、原真さんらの企画で海外登山家の高所順応に関するアンケート調査をやったときも、吉沢さんの豊富な人脈をおおいに活用させていただいた。ハントやボニントン、ハウストン、ホーンバイン、それにソマヴェル……本で知っていただけの大物たちから続々とていねいな回答がとどいたときの感動は、いまでも忘れられない。『岩と雪』が国際的に認知される大きなステップだった。『岩と雪』の大きな財産となった海外交流のノウハウは、すべてこの間に吉沢さんから学んだといってよい。

それまで、自費で送ってくださっていた海外への寄贈も徐々に編集部が肩代わりしていった。仕事の一環である以上、いつまでもご厚意に甘えているわけにはいかなかった。毎号、巻末に英文サマリーをつけるようになってからは、海外からの情報提供が飛躍的にふえた。吉沢さんからいただくばかりだった情報も、逆にこちらから差し上げられるものが出てきた。たまにお持ちするコピーをたいそう喜んでいただいた。張り切って持参すると「ぼくも手に入れたばかりだよ」とおっしゃる場面も、なかには幾たびかあった。同じネタでも、吉沢さんのほうには詳細な地図や写真が同封されており、こちらには文章だけなどということもよくあった。そんなときは、いつも快く写真を貸してくださった。

一九七〇年代は、ネパール・ヒマラヤの解禁とともに山岳雑誌の国際交流が一気にさかんになった時代だった。英米独仏ばかりでなく、スペインやイタリア、旧東欧諸国や中南米までその輪は広がっていった。島国の一雑誌にすぎなかった『岩と雪』に、国際舞台への道を開いてくださったのは吉沢さんである。数々のアドバイスをいただきながら、わたしはただその道をひたすら走りつづければよかった。

残念なことに、『岩と雪』がなくなるというとき、最後の編集長をつとめたわたしが会社を辞めるはめになるのではないかと、吉沢さんはたいへん心配してくださった。もう、あれから三年がたつ。『岩と雪』はなくなっても志は生きています。吉沢さん、ながい間ほんとうにありがとうございました。

吉沢さんの著作から　5

登山とは山へ登る事である。だが登山者の資格としては之のみを以て足るといふ事は出来ない。何となれば「真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考へてゐる人」の謂ひであるからである。実践と研究と思索（反省）の三つが兼ね備へられてゐる人にしてはじめて吾々はその人を一個の登山家（真の登山者）として尊敬することが出来る。実践のみに終始する登山者には多分の危険が伏在する。と同時に実践の伴はぬ場合には机上の空論となる。

一個の登山者としての吾々は常に此の三者に向っての精進と努力を積み重ねて行かなければならない。勿論実践と云ってもそこには自らなる限界がある。体力、年令、環境その他の要素の相異によって此の限界は定まるのであるから、外部からは之に兎角の批判を加へたりする事は出来ないのである。

何事によらず人は常に限界を超ゆる事を慎まねばならない。安全にして完全なる登山に反省が要請せらるる所以である。

研究も亦登山者には不可欠の要素である。研究なき所に進歩はない。登山者は常に研究によって己が限界を高めて行かねばならないのである。而して研究に思索反省の伴ふべきは云うまでもない。

――（**編者注**）『北の山・南の山』（昭和十七年十一月・三省堂刊）の「序」より抜粋。吉沢さんのいわゆる登山者三位一体論のオリジナル語録がこれである。

「いちろう会」はいつまでも

澤藤　美智子
（いちろう会）

吉沢一郎さんに初めてお会いしたのは、日本団体生命保険（株）に吉沢さんが二度目に入社された時ですから、今から三十数年前のことになります。吉沢さんは自叙伝『山へ』の中で、一回目の日本団体生命勤務は、昭和十一年から二十二年までと書いておられます。私はその頃やっと生まれたばかりですから、一回目はご一緒に仕事はしていませんのに、戦争中の会社の疎開先の話に相槌を求められ、そのたびに私はまだ勤めていないと否定を繰り返したものです。

吉沢さんは社報の編集の仕事をされ、私は厚生課でレクリエーション関係の仕事をしていました。当時は夏期に会社が「海の家」「山の家」を設営し、土曜日から月曜日の二泊三日で希望者を募り、ひと夏に三班ほど編成して、遊びに出掛けました。その山の家の場所を決めるのにご相談に伺ったのが、吉沢さんとの初めての出合いでした。

豊富な知識の中からアドバイスをして下さり、また吉沢さんご自身も山の家へ参加して下さいました。『山へ』の中で書かれているように、信州の蓼科山、奥日光、会津の磐梯山、志賀高原の笠ヶ岳、八ヶ岳の横岳、榛名山、霧ヶ峰、飯綱山、黒姫山等へ毎年場所を変え出掛けました。毎年吉沢さんは第三班に参加されるので、その班に参加するメンバーも同じ人達が集まるようになっていました。それは、吉沢さんが出掛けると必ず地元の登山家が訪ねて来て、珍しい話、スライド、8ミリ等々、たまにはそれにお菓子のおまけまで付いて、山の素人の私達には非常に楽しみになっていたからでした。

昭和四十八年の山の家は、会社が保養所を黒姫山スキー場近くに購入したので、その保養所をベースにした計画でした。例によって第三班にはいつものメンバーが集まり、一日目は長野の善光寺を見学してから保養所に着きました。

翌日は管理人の穴原さんにお弁当を作ってもらい、二〇五三メートルの「黒姫山」を目指しました。この時も地元の登山家四、五人の方々がハイキングに同行するために来て下さいました。お天気にも恵まれ、大きな黒姫山は私達にとって、ちょっとハードなハイキングとなりました。初めて参加の女の子や体力に自信のない人は、吉沢さんの後に付いて歩くと途中で挫折せずに山頂に立つことが出来ました。この頃六十代後半の吉沢さんでしたが、まだまだお元気でみんなを指導して下さいました。

黒姫山の下山で起きたハプニングは、今でも語り草になっています。もう少しでスキー場の広い野原に出るという所まで来て、道を沢へ取ってしまい、道が違うと思った時には、かなり下ってしまい、元に戻れば良いものを引き返す気力に欠けた一行は、そのまま沢下りを始めてしまいました。熊笹をかき分け、前の人が急に見えないと思うと穴に落ちたり、倒れた木につまづいたり、必死に歩きました。夕闇が迫って周りの人の顔が見えなくなり始めた頃、やっと林道にぶつかりました。日もとっぷりと暮れて、保養所の管理人さんが心配しているだろうと、まだ元気の残っている男性二人が一行よりひと足先に保養所へ連絡に走りました。保養所では管理人が心配をし、地元の方々に捜索をお願いする一歩手前で連絡が取れ、大事件にならずに良かったと幹事一同はホッとしました。

後で聞いた話では、地元の登山家だから道には明るいと思っていたのはこちらの誤解で、彼等は黒姫山は初めてで海外の山が専門だったそうです。

この遭難一歩手前の山行きの恐い思い出がみ

んなの心を一つにするきっかけとなり「いちろう会」が結成される元となったように思います。連絡係に走った戸田氏、籠谷氏が中心になり、昭和四十九年に吉沢さんが退社された後もハイキングを続けることになりました。

「黒姫山」の山の家では全員がまだ独身でしたが、適齢期の男女達ですから結婚する人達も出てきました。結婚の先手は、戸田さんと、同じ仲間のベッティーさん（吉沢さんの『山へ』の中ではベッチーとなっています。ちょっと余談ですが私はオケさんと書いて頂いています）。これは渾名で、彼女は外人ではありません。結婚しても、奥さんとまたご主人と参加し、子供が出来れば赤ちゃんの時から一緒に歩きました。

吉沢さんが日本団体生命を退職した後は、年に二回のペースで集まっていました。中でも春のゴールデンウィークに大人達だけで出掛けた東北の早池峰山や栗駒山は、例によって、吉沢さんのお友達には大変お世話になりましたが、とても楽しい思い出になりました。

「いちろう会」の名前がついたのは昭和五十二年の、会社の箱根寮に泊まって「金時山」を登ってきた夜のミーティングの時でした。山の家時代から吉沢さんを慕って集まって来るのですから、吉沢さんの名前「一郎」をいただいて「いちろう会」にしましょう……と話し合っている時、吉沢さん曰く「僕が死んだらどうするのか？」と問われました。そうしたら誰かが「吉沢一郎を悼む会」に名前を変えればよいからということで、「いちろう会」と名前が生まれました。それ以後、吉沢夫人も毎回同行され、吉沢さんをかいがいしくお世話されておりました。

日本団体生命の山の家から始まり、独身時代から結婚してパートナーと一緒に参加し、子供が生まれると赤ちゃんの時から（妊婦でも参加していましたから、まさに生まれる前からの参加です）一緒にハイキングをし、子供達の成長に合わせて場所も選択し、近年では子供達も大きくなり、なかなか出席しなくなり、また、吉沢さんの体力に合わせ、最近はもっぱら箱根芦ノ湖畔のキャンプ場でのバーベキュー大会が定番になっていました。

バーベキュー大会の朝、吉沢さんのお誕生日を祝ってお赤飯を炊いて駆けつけてくれる人、吉沢さんがお肉の焼けるまで休んで居られるようにとテントを持参して張る人、自分達と一緒に吉沢さんに楽しんでもらいたいと気を配る気の良い仲間達です。

吉沢さんの亡くなる前年十一月の会で、芦ノ湖畔からの帰り、千石原の台岳のススキがとてもきれいでしたので、吉沢さんに途中下車してもらい、車イスで、散歩を楽しんでもらいました。夕日に映える一面金色のススキの中で撮った写真が、私達との最後の写真になってしまいました。

その夜のミーティングでも、バースデー・ケーキのろうそくを吹き消した後、みんなの所望で「安曇節」を歌って下さった、あの声が今でも耳底に鮮明に残っています。

吉沢さんが逝って、私達も初めて吉沢さんにお会いした頃の年齢に近づいています。あの頃の吉沢さんより体力に自信はありませんが、気持ちだけは三十数年前と同様に若いつもりです。これから「吉沢一郎さんを悼む会」となってしまいますが、折角長年吉沢さんを中心に集まっていましたので、先般みんなで話し合い、会を続けることに決まりました。吉沢さんのお誕生会が偲ぶ会に変わってしまいますが、今後、老いても吉沢さんを見習って元気に過ごせるよう、またハイキングを始めようと思っています。

楽しい思い出をたくさん頂いた吉沢一郎さんに感謝をしてペンを置きます。

合掌

父の思い出

吉沢　謙一
（遺族代表）

故吉沢一郎となって、皆様に見送られてから、四ヶ月が過ぎました。まだ目黒の大岡山に生きているような気もします。

桜も散り、季節も変わって爽やかな風が吹きとおっています。今頃はその風に乗ってアンデスにいるか、K2にいるか、天国にいることを信じつつ思い起こしております。

明治、大正、昭和、平成の四つの時代と、一九〇三年から一九九八年の二〇世紀を山一筋に生きた幸せな一生だったと思います。

父のいう、人生を変えた、忘れられない、記念すべき「一九六一年」は、五七歳の時、母校一橋大学のアンデス遠征を選択し、サラリーマンを辞めて、少なからぬ方々にご迷惑をおかけし、助けていただいたことにあると思います。私達も止めれば良かったのかも知れませんが、何もいえなかったのだと思います。

父が輝いていたのは、アンデスから帰ってきた頃とK2の頂をバルトロ氷河の雲間から初めて仰ぎ見た頃だったと思います。K2から帰って、大岡山の居間で、山と渓谷社の方が撮って下さった写真は、一番いい時の「顔」です。

翻訳は忙しい中をよくコツコツと二、三行ずつでも続けていました。

『山がそこにあるから』（アンスワース著、中村・中島・佐藤訳）という訳本のあとがきで、一橋大学の後輩の方々に訳していただき、私はこういう人たちをたくさん持っていると自慢気にいい切れること、またスピーチをしたとき、言いたいことを言って「文句あるか」といったらシラケないで笑い声が起こったことなど、皆さんへの信頼と自信がなければいえないことと思います。

山の洋書はよく買っていたようです。子供が六人いましたから生活費、教育費もかかり、楽ではなかったと思います。毎晩新聞等の切り抜きをしてスクラップに貼っていました。特に家族と話をするということもありませんでした。

もう少しお金があったら、ご迷惑をおかけせずに済んだこともあったことと思いますが、お金がなかったから遠慮もあり、謙虚さもあり、皆様の協力して下さったことに対する感謝の気持ちが年々強くなって良かったと思います。

良い意味で欲は強かったし、負けん気も強かったと思います。「何くそ」という言葉によく気持ちが出ていたように思います。

それにしても人づき合いが悪いと思われていた人を助けて下さった方々が何人かいらっしゃいました。『山へ』の中で「……そんなことをしてくれる人がいるか」という言葉に本当に感謝、感激の気持ちが出ていたと思います。山という人をひきつける、共鳴させることをやっていたのでよかったし、賛同が得られたことかも知れません。

「やくざなことはもうおやめなさい」と尊敬する槙様に忠告されても、またやってしまう欲の強さが出てしまったと思います。

アンデスからアメリカを回ったとき、日本の山岳会を代表してスピーチをする機会があり、ホテルで英語で原稿を書き、英語でスピーチをしました。帰国して後日その旨報告をしたら「よいことをしてくれました」とほめられたそうです。

英文タイプをパチパチと打っていたことは憶えております。カーボン紙をつかっていました。国際から海外へ手紙を書いていたと思います。国際山岳連盟の総会（ロンドン）に出席の折、発表するテーマに「グレード」等級のことにしようかというのを聞いたことがありました。何か専

門的なことも研究してきたのかなと思いました。また「遊覧」列車の中では、漢字の書き方を説明して皆さんが興味をもっていれかわり聞きにきたことを聞きました。

海外に出たことはほとんどなかったので、ワンチャンスを生かしたとも見えますが、生かすための下地（ヒンズー・クシュ、カラコルムの研究と文通）を積み上げてきた信頼があったから出来たことと思います。米国、英国、カナダの山岳会の会員になれたのも外国の方々が応えて下さったのだと思います。

好きな本は、「誰にもやらん」といっていたそうですが、何の整理もせずに逝ってしまいました。針葉樹会の中島様をはじめ、中村様、倉知様、丸山様が本の落ち着き先をみつけて下さいました。父が一番おつき合いの長かった山と渓谷社様が引き受けて下さいました。父が一番ホッとしていることと思います。

先立たれた甘利様、新貝様、原田様ほかの方々に対し、力のたりなかったことで、心をいためていたことと思います。今頃は、その方々と話に花を咲かせていることと思います。お世話になった日本団体生命の現役、OBの方々そのご家族の方々と山行を楽しんでいたことは、写真を日頃みておりました。

その会の名前が「いちろう会」とは最近知りました。倒れる直前の11月6日恒例の箱根行を、その様子をビデオに撮って下さいました。皆様から九四歳の誕生日を祝っていただいたり、安曇節を歌い、記念すべき「一九六一年」を語っておりました。葬儀の折も「いちろう会」の方々に助けていただきました。

軽い脳梗塞で、平成9年11月15日に倒れてから入院しましたが、気力も回復し始め、もう家に帰る、タバコを吸いたいとよく言うようになって元気になってきました。

平成10年1月15日、痰をのどに詰まらせて息が止まっていた直後看護婦さんに発見され、あと三分発見が遅れたらダメといわれて、あやうく一命をとりとめました。

1月22日昼食をもどしたとき、気管支に入り、肺に入って、吸い出す努力を続けましたが息がつまって力つきました。病気ではなく、これから元気になっていくものと思っていました。

もっとものを書きたかった、もっと本を読みたかった、もっと地図をみていたかったことと思います。

皆様のお陰をもって、あたたかいご支援を受けて山一筋の幸せな一生であったと思います。

遺族といたしましては、お世話になり、心からお礼を申し上げます。末筆ながら皆様のご健康とご活躍をお祈り致します。

クリンチさんのこと

私からの追悼文の依頼にたいして、普段は返事の遅いクリンチさんが、こちらが指定した期限より可成り早く送ってくれた。吉沢さんとクリンチさんの交遊は、丹念に自分のファイルをめくって時系列的に正確に書いてくれた追悼記に整理・凝縮されている。クリンチさんやアメリカン・アルパイン・ジャーナルの名物編集長、故アダムス・カーター氏との親交を通じて吉沢さんは日本の登山界の情報を海外に発信することにおおいに貢献したことを付け加えておきたい。

アンデス遠征が吉沢さん、一橋山岳部とのご縁の始まりだが、三十数年を経て、私の梅里雪山巡礼路一周のときも貴重な情報とガイダンスをいただき、たいへん役立った。今年の十一月上旬には、京都大学学士山岳会のカラコルムのチョゴリザ初登頂40年記念の催しに招かれてご夫妻で来日する。東京にも二日間滞在するので、お目にかかって吉沢さんを偲ぶ話に花を咲かせたいと、今から楽しみにしている。

中村　保

Ichiro Yoshizawa

I first met Ichiro Yoshizawa in the summer of 1961 in Berkeley, California, at the home of Francis Farquhar where I was staying. Earlier in February 1960 he had written me % The American Alpine Club saying that he was planning an expedition to the Pucahirca group of the Cordillera Blanca in Peru and since I had been there in 1955, he requested information which I sent to him in a long detailed letter. When we met in Berkeley I gave him more information and I also told him that there was one unclimbed 6,000 meter peak in the group. Following my information, Mr. Yoshizawa and his expedition successfully climbed the mountain and made the first Japanese ascent of a 6000 meter peak in the Andes.

We kept up a heavy correspondence and I next saw him in 1963. I was returning from a visit to Everest base camp and I had a very brief stop in Tokyo. Mr. Yoshizawa and his son came to the airport at 3:00 in the morning and we met for 15 minutes at the airport in Tokyo. The exchange of letters continued and our next meeting was longer. It was in 1968. I was now the president of The American Alpine Club and living in a small rented house in Bethesda, Maryland. Mr. Yoshizawa came to visit us and then he accompanied me to the west coast as I met with various sections of the Club.

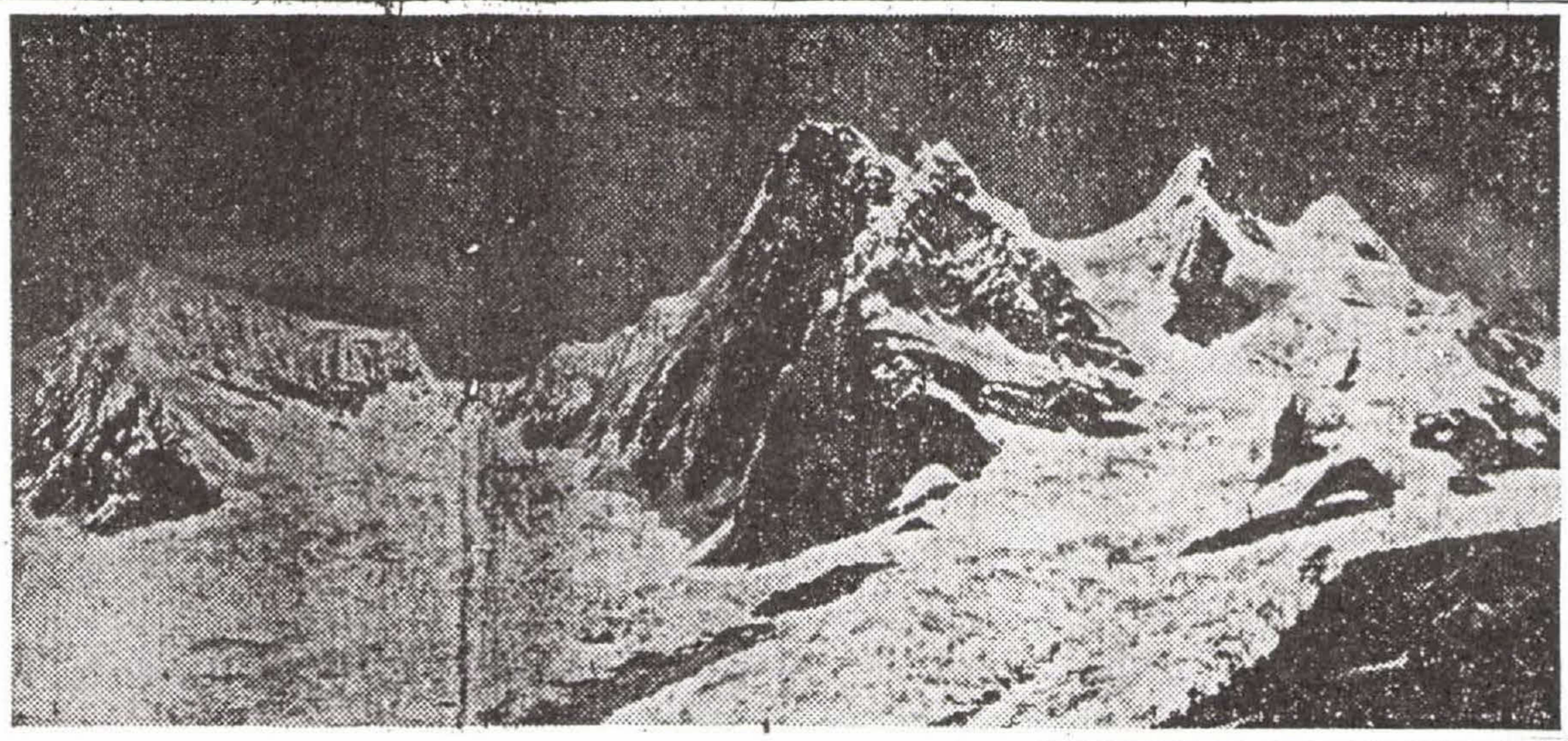
Later in the early 1980's after his successful K-2 expedition, Mr. Yoshizawa called me from Los Angeles on his way back to Japan from a visit to the United States. I asked if he could fly up to Palo Alto, join us for dinner, and stay with us before going on. I picked him up at the airport and drove him to our house. What I did not tell him, was that by pure coincidence the famous Italian climber, Riccardo Cassin, also was coming to dinner. We rarely have guests for dinner, but I was more than happy to say nothing and let Mr. Yoshizawa and Mr. Cassin think that this was an ordinary day at our house.

I last saw him in Tokyo in 1990. I was on a brief business trip and he and his son made a great effort to visit me at my hotel in Shinjuku.

Mr. Yoshizawa was great company. He also was extremely generous in sending me copies of the many books he translated and wrote. My file of our correspondence is over six inches thick as we both moved along in our respective mountaineering worlds and often wrote to each other about what we were doing. One of my rewards for being a mountaineer was in getting to know him. He was a dear friend. There are not many people who will drive for two hours for a 15 minute meeting at 3:00 am in a airport.

All good wishes,

Nicholas B. Clinch



ペルー プカイルカ北峰に初登頂

一橋大隊が成功

せり合う十カ国の先陣

ペルー・コルディエラ・ブランカ山群の北端にそびえる未踏峰プカイルカ北峰（六、〇五〇）に挑んでいた一橋大学ペルー・アンデス遠征隊（朝日新聞社後援）は去る十二日午後六時十五分、中村保（三）中川滋夫（三四）中島寛（三）の三隊員がついに初登頂に成功したと二十二日、青沢一郎隊長から朝日新聞社に報告があった。プカイルカ峰は中央峰、北峰、南峰の三つからなっており、これまで中央峰が一番高いと思われていたが、同隊が偵察した結果によると最高峰は北峰であることが分かった。

隊長青沢一郎氏の電報次の通り。

▽千五百㍍にわたる大アンデス山脈中にただ一つ残されていた六千㍍以上の南方ペルー・アンデスのコルディエラ・ブランカにそびえるプカイルカ北峰（六、〇五〇㍍）を一橋大学山岳部遠征隊の全登頂隊員六人にその頂上を踏むことをゆるした。われわれは、このことを決して自分たちだけの力でやったとは思っていない。登山界における世界ならびに日本における多くの先輩たちの眉に乗り、また多くの理解ある後援者たちのシリ押しによって、この偉業はなされたのである。この際心からこれらの人々にお礼の言葉を申し送る。

▽第一次登頂隊は中村保、中川滋夫、中島寛。一九六一年六月十二日午後六時十五分登頂し、登頂後五、七五〇㍍の地点にビバークし滞在三十分。

▽第二次登頂隊は甘利仁朗、丸山則二、倉知敬。一九六一年六月十三日午後一時二十五分登頂。滞在二時間二十五分。

▽六月十四日より各キャンプを引き払い、六月十七日全員ベース・キャンプに集合、二十一日ところリマに向かう。病人、ケガ人一人もなし。なお隊長は第二キャンプ（五、一五〇㍍）まで登り、士気を鼓舞、元気なり。

長い準備の結果に

高橋一橋大学長の話　初登頂の知らせを首を長くして待っていた。各方面のかたがたの後援をいただいて成功を得ることができてありがたい。隊員たちは大学に入学したころからスペイン語を勉強して、長い間かかって今度の準備を進めてきたわけで、私もともに喜びたい。一行は登頂だけでなく、いままであまり知られていないアンデス地域の経済事情を調査するのも目的なので、その方面でも成果をあげ、貴重な報告をよせてくれることを祈っている。

大アンデスの未踏峰

プカイルカ・ベースキャンプからの一橋大学山岳部アンデス遠征隊

プカイルカ峰の全景（中央が北峰）

美しい氷雪の見える山

【解説】ブランカ山群は南緯八度付近にある太平洋岸にそった南北百八十㌔にわたる山脈で、六千㍍級の山が三十座余りある。気象的な変化から独得の美しい氷雪が見られる山だ。

このプカイルカ峰（中央峰、南峰、北峰）は一九三二年ドイツ・オーストリア隊が測量したのをきっかけに、一九五五年アメリカ隊、五七年フランス隊、昨年はイタリア隊がその最高峰の登頂をところみたがいずれも頂上直下で失敗したいわくつきの山だった。今年もイタリア隊二隊をはじめ十カ国の登山隊が初登頂の栄冠をねらっていた。

最大のニュースだ

竹田好文氏（第一回ペルー・アンデス遠征隊長）の話　登山界にとっては今年最大のビッグニュースだ。このプカイルカ北峰は昨年、イタリア・トリノ登山隊が頂上の寸前まで登って失敗しており、各国で注目していた処女峰だ。一橋大学の遠征については私もほんのすこしばかり相談にのったが、とにかく青沢隊長をはじめ隊員の研究心、周到な準備は驚くばかりだった。私は一橋隊のスケジュールを見ながらきょうか、あすかと心待ちに朗報を期待していたがこれでホッとした。

青沢一郎隊長　中村保君　中川滋夫君　中島寛君　甘利仁朗君　丸山則二君　倉知敬君

プカヒルカ北峰初登頂の新聞記事（注＝記事にはプカイルカとなっているが、後にプカヒルカの表記に統一した）

＊注　吉沢一郎氏遺稿（これが吉沢さんの発表された文の絶筆となった）

人の一生には節目というものが幾つかある筈ですが、私にも大小はあったが、そんなのが幾つかあった。一番大きかったのは、私の場合一九六一年におこった。全く唐突な話ではあったのですが、いきなりの話で、びっくりしてしまいました。大袈裟に聞こえるかも知れないが、この話で私の人生が一ぺんに変ってしまったのだと言ってもいいでしょう。

色んな貴重なアドヴァイスをくれたのは、アメリカ山岳会のクリンチでしたが、ブカヒルカ（ブカイルカともいう）での天候による失敗と、いろいろ経験を持っていたので、有効な助言を沢山くれました。私自身はクリンチの幾つかの家で色々世話になりました。サンフランシスコやワシントンでです。

いずれにしろ、余りにも藪から棒のような突然の話で、私も即答はさけましたが、そのとき、結局は承知しませんでしたが、どうにかなるだろうと思ったので、最後には承知することになってしまったのです。色々面倒なこともありましたが、最後には、一橋大学の公式登山隊の隊長は引き受ける事になった次第です。

金はどうするんだい、と隊員の中村君に聞いたら、あなたが集めて下さいと言う。アンデスは、丁度当時は日本から行く所（登山隊）は余り無かったが、外国人の登山隊はかなり入っていたので、参考書は沢山あったため、助かりました。

一番の問題は、そんなに長く（約半年も）、遊びに行くために休暇を願い出るなんて、とても届ける勇気がありませんでした。当時、電通はやかましい会社（主として吉田社長のこと）で、こんな事で許可を出す筈がないのでした。

さて弱ったなと散々考えましたが、当時、日本山岳会の会長であった松方三郎氏が浮び出ました。彼なら話は

連載

山と人と本と

吉沢一郎　*Yoshizawa Ichiro*

旨いし、白を黒と言っても、それを通してしまう学者であるし、人ずれもしているので、この人なら吉田社長を理屈で封じ込められようということを思い出し、彼氏のお伴をして吉田社長にじか談判をやりに来てもらいました。

何か訳のわからない問答をやりとりしており、お互いにへ理屈を述べあっていましたが、流石（さすが）の吉田社長も、松方さんの演説には頭を下げ、これも結局はOKとなり、会社内での語り草に、長いこととなっていたようであります。吉沢というのは、何という無茶苦茶な野郎だなという噂話が続いていたという話。吉沢という男、ありゃ不思議な存在という意味で評判になっていたとか。さもありなん。互いに常識破り、二人の話は世間には通用しないものばかりであったよう。吉田社長も「文化人、松方三郎」には閉口したらしい。後はどうなろうと、当時は私の勝ちであった。吉田さんの伝記を、ある古本屋で見つけたので買っておいたが、今に高くなるに違いない。でも私は売らないよ。

当時、出発は羽田だった。隊員達（五人）は皆船で行ったが（荷物が多過ぎて船便にした）、隊長と副隊長（甘利君）は一緒に飛行機。私を兄弟や妹達が見送ってくれたが、甘利君は覚えていない。

出発前にあったエピソードを二つ。中島君と○○君。中島君はA社、○○君は伊藤忠。この話の○○君の名前は忘れてしまった。とんでもないが、人の名前はこの頃よく忘れてしまう。失礼だが許して下さい。しかし内容は同じだから勘弁して下さい。

採用が決った時に両方とも贅沢なお願いをした。両方ともこの五月にアンデスへ行くので入社を半年延ばして下さい。然し戻ったら必ず出社させて頂きますが、如何なものでしょうか。と聞いてみた。両方とも一流の会社であるから、あるいは断わられるかと思ったら、答えは同じであった。

今は世間ものんびりしており、皆さんをのがしたら、チャンスが失われる事になるので、遠慮せずに山の方へ熱を入れて下さい。特に申し上げたい事は、自分のお金で外国へ出かけ、特にアンデスの山々ともなれば、それらの国々へ行き、世情を研究してさえ下されば、当社のためにもなります。是非よい機会ですから山登りもゆっくりとエンジョイして来て、よいお話を拝聴したいと思っております。どうぞ気がねせずにいって来られますように。ということで、両方とも満足して、引下って来たという次第である。

世の中ものんびりしたもので、こういう取引もある事は覚えておいた方がベターであろう。それにしても、昔は何でものんびりだったが、こういう話は聞いた事がない。こういう話を持ち出したことは、自分達にもそれ相当の自信があったからであろう。兎（と）に角（かく）両方とも立派なもの、ファイン・プレーであろう。目出度し目出度し。

（つづく）

『山と渓谷』1997（平成9）年12月号より

〝空いた〟後見役

丸山則二（昭三十三）

吉沢さんの魅力は何と言ってもその飄々として偉ぶらない気さくなお人柄であった。表裏がないから余計な気遣いが要らず、後輩からすると付き合いやすい大先輩であった。アンデス遠征隊の隊長として一九六一年に吉沢さんがペルー、ボリビアに行かれた時、吉沢さんが五七歳で我々隊員とは三〇歳以上年齢差があったわけであるが、普通なら隊員から見て煙たい親父になりかねないところを、吉沢さんのお人柄が若造ばかりの隊を程よく包み込み、年齢差がかえってまとまりを与えてくれたと思う。

吉沢さんは文を書くのが速く、要点をてきぱきと書かれるのが上手かった。アンデス遠征は朝日新聞の後援を得た関係で節目節目で記事を送る義務があったが、これを隊長が担当し、いつも小さな紙切れに実にこまめに書いておられた。手元の小生の日記帳に、JALのメモ用紙に書かれた隊長のメモがたまたま残っていた。一橋大学アンデス遠征隊長吉沢一郎と署名されているから、朝日新聞に電信か電話で送った記事の原稿だとおもわれる。多分第一報と思われるが一部を紹介する。

「5月24日トラック隊2名（中川、倉知）は5時45分、本隊は25日午前4時半タクシーにてリマを発した。太平洋岸のパンアメリカンハイウェイを北進……。タクシーがガタガタでさっぱり行程が捗らず、……車の大修理の后……（午後）2時30分遂に4080mのコノコチャ峠につく。生まれてはじめて富士山以上の高地に達したわけである。夢にまで見た真っ白な雪と氷に覆われたアンデスの山々、コルディエラ・ブランカの山波が本当に眼の前に展開しているではないか。車をおりて写真をとろうとしたらフラフラとした。リオ・サンタの源流が、コノコチャ湖から一筋の小流となって北に蛇行している。

いまだみぬスイスのような風景が車窓に流れて行く。やがて流れも大きくなった頃遂に最後の根拠地ワラス（Huaras）についた。ときに（午後）4時35分。……全員元気、高山病一人もなし。」

今読むとあれほど山に詳しい吉沢さんがスイスの山を御覧になっていなかったというのは意外に思えるが、昔は外国へ行くということはそれほど大変だったわけで、アンデス遠征隊が出るときも初めての海外登山ということで、山岳部の関係者はもとより、大学、如水会、友人、家族等多くの人達が大きな期待と不安をもって見守っていた。加えてこの遠征は朝日新聞を始め多くの企業や個人の寄付で実現したものであり、また多分に寄付集めを念頭に置いてのことであったが、文部省の後援も貰い学術調査隊を名乗っていて、世間的にも広く報道されたプロジェクトであった。

こうした状況を考えると、今にして気が付いたことだが、隊長である吉沢さんにとって〝無事〟且つ〝成功〟させるという二文字がとてつもないプレッシャーとなっていたに違いない。もとより若造の私などにはどう見ても好々爺の吉沢さんがそんなプレッシャーを感じておられたとは分かるはずもなく、だから吉沢さんと吉沢夫人が遠征を無事終わるまでの間、隊員やその家族に対してどんな思いでおられたかを深く考えてみたこともなかった。

最近になって、8年前に亡くなった母の遺品の中から、吉沢さんとご夫人からそれぞれ一通ずつの母宛てのお手紙が見付かり、その中でお

二人が我々隊員と家族のことを親身になって心配して下さっている文面に接し、今更ながらお二人の暖かい心情とお心配りが分かり頭の下がる思いである。差支えのある文でもないので一部披露させていただくことにする。

昭和36年7月11日付、吉沢夫人から母へのお手紙

「此の度の南米アンデス遠征の結実を皆様の暖かい御理解ある御支援の賜物と心から感謝申し上げております（注：6月12日及び13日にプカヒルカ北峰初登頂に成功している）。また隊員の御家族の御信頼を頂き大切な御子息様をあずからせて頂きましたこと厚く御礼申し上げます。遠征の三大目標の一つのプカヒルカ峰を成し遂げられたとはいえ、未だアポロバンバ山群に於ける諸活動、容易で無い経済調査と困難は続いて居ります。此の度の計画が発表されまして以来、此の企には何の力添えも無力の私には出来ませんでしたけれどせめて自分の命に替えても隊員の皆様の御無事をと日夜祈り続けて居ります。何卒御帰国迄お健やかにお元気に御家族の皆様のお手元へお返し申し上げられます様切に心から祈って止みません。」

昭和36年8月20日付、吉沢隊長から母へのお手紙（ボリビアのラ・パスからの出状）

「もう新聞でご承知かと思いますがわれわれはついに山を離れ都に戻りました。もうご安心下さって結構ですが、食いすぎで胃散の御厄介位にはなるかも知れません。随分長い間でしたが一人の病人も一人のケガ人も出なかったということは全く天佑でありました。私の隊長としての責任の大半も、元気な坊主どもを心配しておられた親ごさん達にお返しすることによって解消するものと思います。

アンデス遠征中、ボリビア・カカワイチョ峰登攀中の吉沢さん

その上われわれ遠征隊の山における成果は予期以上のものでありました。登った山十七座、その内処女峰は十座もあります。全く自慢してよいと思いますし、事実東京でも皆おどろくと同時に喜んでいるようであります。私も58歳に近い身で5450mの処女峰の登頂に成功し、その上丸山君に助けられて5836mという高い山に登ることが出来ました。息が苦しくて随分辛かったのですがとうとう頑張ってしまいました。それでも下って来てからああ登っておいてよかったと思いました。私にはもうこんな機会は再びは来ないでしょうし、体力もなくなっていくでしょう。

兎に角、われわれは登山としては大成功でありました。大威張りで帰国出来ます。学校の名も大いにあげたと思っています。」

吉沢さんは如水会報昭和36年12月号に「白い宮殿に挑む」と題するアンデス遠征を総括する文を寄稿しておられるが、その中で

「（8月17日に全ての登山を終えてボリビアのラ・パスのホテルの扉をたたいた時には）肩の荷がすっかりおりて身体中の力がぬけさって、危うく前につんのめる気持ちさえしたものである。」

と述懐されている。いかに大きなプレッシャーを抱えて遠征に臨まれたかがこの文からも推察できる。

母へのお手紙の中で吉沢さんが触れられてい

る5836mの山とはボリビアのププヤ北部にあるウェランカヨック（Huelancalloc）のことであり、この登山の詳細は針葉樹アンデス遠征特集号に吉沢さんが書いておられるので繰り返さないが、私がはえあるザイルパートナーに選ばれた経緯を記しておこう。

「昨夜ジャンケンの結果自分が吉沢さんとポヨ、マルチネス（いずれもボリビア山岳会員）を伴ってウェランカヨックを稜線伝いに登ることになる。甘利さんと中川はウェランカヨック西壁へ。」（中村、中島、倉知は別地域で別行動中）

8月13日の私の日記の書き出しはこんな風になっているが、甘利さんが針葉樹特集号に書いた記録には私が選ばれた経緯がもっと正直に暴露されている。

「ププヤでの最後の登攀、ウェランカヨックに吉沢隊長と誰が一緒に行くか、もめた。吉沢さんは誰でもいいから早く決めろと言わんばかりに、テントの奥で時々こちらをにらむ。結局ジャンケンに負けた丸山に決まった。」

同じ事を吉沢さんも特集号に記しておられるので参考までに引用する。

「それやこれやで5日間は瞬く間に過ぎてしまったが、自分としても心残りのないわけではない。そこで最後に一山お土産をという訳で、ウェランカヨックの第二登を考えたのである。幸い丸山が空いたのでこれを後見役とし、マルチネスとポヨをラッセル車に使うということで計画は出来あがった。甘利と中川の二人は、隊長のような年寄りに、ウェランカヨックなんかとても、という意見を密かに持っていたらしい。」

あの日は遠征の最後の登攀日であり自分も広い雪稜をただ登るだけの登山よりもっと歯応えのあるやつをやりたいと思っていたから、前の晩ジャンケンで負けた時は正直いってガッカリしたものである。しかしそんな様子が吉沢さんに知られてはまずいと気にしていた記憶があり、私の日記に〝負けた結果〟と書いていないのもそんな気持ちの表れであろう。

吉沢さんも書いておられるが、ウェランカヨックの登攀は吉沢さんにとって本当につらいもので、高度が上がってからは10歩歩いては休み、が5歩になり、ついには3歩も歩くとハアハアいって立ち止まる有様で、吉沢さんはもう自分は行けないからと座り込んでしまわれた。私は吉沢さんと残り、マルとポヨに頂上を探しに行かせたら、15分もして頂上に登ってきたと勇んで戻ってきた。実際には濃いガスのため頂上の手前のこぶを頂上と見誤って引き返してきたのだが、彼等が短時間で帰ってきたお陰で吉沢さんに最後の力をふるいしぼる気力を引き出させたのであって、マルとポヨの貢献度は実に高い。私の日記によると

「8時間と15分の苦闘の末57歳の吉沢さんは5836mの頂上に世界で2番目の人として立ったのである。感激の握手。吉沢さんの顔がサングラスを通して感極まってゆがんで見えた。喜んでもらえると自分も嬉しくなる。」

吉沢さんも書かれている。

「ガスの晴れ間からみるとこれから先には高いところはない。正に5836mの頂上に立ったのである。ああ来てよかった。あそこで戻ってしまったら途中の苦労が水の泡になるところであった。第二登とはいいながら私としては夢にも思わなかった高さである。丸山も喜んでくれたが、私としても生まれて57年9か月と7日に当たり、恐らく日本人では50歳以上の最高登頂記録を立てたのであるから十分満足していい訳である。」

あの日感激の握手をし吉沢さんの感極まってゆがんだ顔を見た瞬間、意外なものを見た者が抱く深い感動を覚えたことを記憶している。かくして「空いた」後見役は忠実にその役割を果たし、感動という思いもよらぬ果実と、ボスと二人だけしか共有できない生涯の思い出を得る幸運に浴すことができたのである。

吉沢さんとゴルフ

中川　滋夫
（昭三十六）

吉沢さんのご自宅に初めてお邪魔をしたのは大学四年の春（一九六〇年）、アンデス遠征のことでT中さんにつれられ当時の滝川のお宅に確か中島、倉知と学生服姿でお邪魔したのが最初でした。

大変な数の山の蔵書に圧倒されたのと、さして広くない（失礼）一軒家の庭先にゴルフの練習場があったことが印象的でした。往時のゴルフは昨今と違い、ごく限られたエグゼクティブ・クラスのスポーツで、一橋にゴルフ部はまだ存在していなかったし、青木、ジャンボのデビュー以前、中村寅吉、小野晃一が日本でのワールドカップ（当時はカナダカップ）で優勝し、ゴルフが一般大衆にやっと知られるようになった頃といえましょう。

「会社のエライさんにすすめられて……」とおっしゃる吉沢さんが自宅の庭先にネットを張り自宅練習に励んでおられたあの頃は、相当ゴルフに熱中されていたに相違ありません。

現に、アンデス遠征にアイアンを数本忍ばせ（ドライバーはさすがに入っていなかったと記憶します）、アンデスの氷河の上でカラーボールならぬ赤マジックインキボールでショートアイアンの練習を楽しまれ、帰国されてからも「四千メートルの氷河の上でボールを打ってきた」とゴルフ仲間に自慢されたとお聞きしています。

我々も初めてクラブを握らせてもらい、見よう見まねでボールを打ったのがゴルフとの最初の出合いでした。

初体験といえば、吉沢さんは護身用に小型ピストルを借りていたが、ある時「君も撃ってごらん」といわれ、無人の氷河に向け発射し「ポーッ」としていると、例の独特の「ウフフフ……」という笑いと「たいしたことないだろうー」というセリフが返ってきたのが、今でも鮮やかによみがえります。

数ヶ月にわたるペルー、ボリビアの山登りを終え、ボリビアの首都ラパスに着き、当時、伊藤忠ラパス支店長の池田公明さん（昭和33年東外大スペイン語卒。父君は吉沢さんと一橋で同期）のアレンジでラパスのゴルフ場に吉沢さんのお供で御一緒しました。

なにせラパスの飛行場は富士山と同高度、お金持ちほど下町に居住し（高度が下がり空気が濃く住みやすい）、泥棒は空気が薄いので歩いて逃げるといわれる御国柄で、今から考えるとラパスにゴルフ場があったこと自体、不思議な気がします。

空気抵抗の少ない高地で、吉沢さんが小気味よく飛ばし、例のチョットがにまたスタイルでスタスタ歩かれ、

「山男はさすがに強いですなー！」

1961年、ボリビア・アンデスのアポロバンバ山群ウエランカヨック峰の氷河にて

と池田さんをびっくりさせたのもついこないだの様な気がします。こちらもコースを廻り時々打たせてもらい、ゴルフとはどうゆうことをするのか初めての経験をさせていただいたのがコースでの筆おろしでした。

アンデス遠征後、吉沢さんとは色々な機会にお会いしてきましたが、何故かゴルフが話題になることはなく、どの程度上達されたのかも存知あげません。

こちらはロスアンゼルス、アトランタ（かの球聖ボビー・ジョーンズのホームクラブである）、バンコックそして現在のシンガポールと、不思議にゴルフ天国に仕事場があり、すっかりゴルフにはまってしまいましたが、元をただせば吉沢さんからゴルフの手ほどきを受けたことはまぎれのない事実なのです。

「山登り」と「ゴルフ」――一見関係のないように思えますが、

・自然との交わり・自己との戦い・目標への挑戦・心技体の一体感・道具へのこだわり・インドア（書物）の豊かさ・年齢に関係なく楽しめる・仲間との交遊、等々、

共に奥の深い、味わい深いスポーツ（道楽）であり、この二つに出合えたことに深く深く感謝している次第です。◇

吉沢さんの横顔

大賀二郎（昭三十六）

《その1》アンデス隊長と留守部隊

一九六〇年末から六一年にかけて、われわれ留守部隊も卒業を目前にしつつアンデスの準備で多忙だった。今は取り壊され高層ビルに変貌しつつある一橋講堂の地下を借りて、物資の集積や書類の作成など種々の作業に忙殺されていた。そうしたある日、ふらりと吉沢隊長が現れたので、私は日頃のフラストレーションを思い切ってぶつけてみた。

「あのー、エベレストってわけにはいかないんでしょうか」

隊長は笑いも怒りもせず、ゆっくりと答えて下さった。

「うん、物事には順序というものが有るからな」

「はあ……」

ということで終わったが、貧乏で、たとえ資金が集まっても外貨割り当ての難関を突破する事が至難だったあの頃、稀有の機会をあまりにも地味な目標に消費するのは……という思いは正直なところ払拭できなかった。

しかし、半年後にはプカヒルカ等々の目標選択がいかに正鵠を得たものであったか、隊長と隊員の能力が高かったか、が証明され、われわれも喜びと感激に胸を膨らませたものであった。

話は前後するが、遠征準備に忙殺されていた時、私は一橋大学の自動車部からダットサンを借りてきて吉沢隊長の運転手を務め、あちこち走り回った。隊長となると、山そのもの以外に色々仕事があるものだと感心する毎日だったが、「三浦駐秘大使御赴任お見送り」なる仕事で羽田空港に行った時、巨人軍のベロビーチ・キャンプ行きに重なり大賑わいだったが、隊長に

「長嶋だけ居ませんね」

と云ったら、眉を寄せ大きな声で

「ナカジマ？」

と言われ、吹き出してしまった。

もう一つの思い出は、亡父の代わりに叱られたことである。筆者の父は昭和13年の伊藤半弥ゼミ出身で日産自動車に居て、吉沢さん同級の川又社長との寄付などの中継役をしていたが、あ

る日吉沢さんに

「お前の親父に30分以上待たされた」

と延々と怒られた。それは申し訳ないが私に言われても困るし、父からは

「川又さんが幾ら出せばいいんだというから、20万といったら、そんなに出すのかと云うんで、吉沢さんじゃないですかといったら、オヤジふーんと云って黙っちゃった」

という話を聞いていたので、苦笑するばかりであった。因みにこの時の法人関係の寄付は平均5万円、吉沢さん改めてお許し下さい。

《その2》メキシコの吉沢さん

一九七七年一〇月一〇日夜、吉沢さんが単身でメキシコ・シティーにお見えになった。20年前の事でよく覚えていないが、当時駐在していた中村保さんと私が空港にお迎えし、中村家にご案内した。深夜まで歓談し、吉沢さんはそれから一週間中村家に滞在された。翌日は訪墨目的のメキシコ市で催された国際山岳連盟の総会に出席され、中村さんが付き添われた。夜は中村家で、筆者も仲間に入れていただいてK2の素晴らしいスライドを見せて頂いた。

一二、一三、一四日は中村さんが色々お世話をされ、精力的に現地山岳関係者と意見交換等をなさったようだが、細かい記録は残っていない。

一五日は土曜日だったので、大賀がメキシコ・シティーから90キロ北のクエルナバカにご案内した。シティーのある盆地から三〇〇〇mの峠に駆け上がり駆け下りると、日差しが一挙に激しくなり、赤い熔岩土にタバチネスやハカランダが咲き乱れるクエルナバカに着く。当時の吉沢さんはK2で頭が一杯でおられたから、氷雪のかけらも無いこの光景は如何なものかとも思ったが、ラス・キンタスという荘園風のレストランで、大木の涼しい葉陰で屋外ランチを楽しんで頂くことができた。

その翌日、吉沢さんはサンフランシスコに向かわれた。そこに住むクリンチ氏と語らう機会を作られたことだろう。 ◇

吉沢さんとスペイン語

アンデスに行くために、丸山君と一緒に私はスペイン語を勉強することになった。吉沢さんは山の本を読むためにドイツ語やフランス語に取り組んだ。昔は遠征に出かけるために、先ず言葉を習ったなどと、いとも簡単に海外に行ける経済大国日本の若者と比較するつもりはない。が、多少の努力の甲斐あってか、社会人になって、後年ラテンの国に勤務する機会に恵まれ、大賀君ともども、メキシコで吉沢さんを迎えることができた。

私のスペイン語は耳から覚えた、いい加減なレベルだが、メキシコ市で開かれた国際山岳連盟の総会のレセプションで、ピレネー山脈で鍛えたバルセロナ山岳会の尖鋭的なクライマーとの交歓の通訳をさせていただいた。吉沢さんご自身もアンデス、奥アマゾンと二度の遠征の指揮をとられ、持ち前の向学心から、スペイン語にも強い興味を示していた。スペイン語は日本人には話し易い言語だが、時々勘違いして、笑わせる種も多い。吉沢さんの失敗談を一つ紹介しよう。

一九六一年七月、ペルーから汽船でボリビア領に入り、入国手続きをしている時、係官から「あなたのESTADO（独身か既婚かの意味）は何か」と聞かれた。吉沢さんはすかさず“CANSADO”（「疲れた」の意味）と涼しい顔で答えた。“CASADO”（「既婚」の意味）と間違えてしまったのだ。相手は怪訝な面もちをしながらも、小さな堂々たる初老の日本人を黙って通してくれた。その場に、確か甘利仁朗さんも一緒だったと記憶している。懐かしい思い出である。

中村　保

吉沢さんとのふれあい

倉知　敬
（昭三十八）

初めて吉沢さんにお目にかかったのは、まだ学生の頃、アンデス遠征計画が採り上げられていた最中の針葉樹会総会の席上だった。昔の如水会館の南北日本間で会合は進められ、吉沢さんは最奥の席の真ん中にどかっと座り、難しい顔をして大声で話されていた。それはいかにも怖そうな、雲の上の人だった。

それからあまり親しくお話する機会もなく、いきなりペルーでのほとんど毎日ご一緒する共同生活の中でのお付き合いが始まった。吉沢さんにしてみれば、ぼくはどこまで頼りになるか判らぬ心配の種で、辛抱して相手を務めた、ということだったろう。

「オイ、子供！」とからかわれて呼ばれたりしていたのであるが、一方ぼくの方はさりとてあまり畏縮していた記憶はなく、一言でいえば伸び伸びやらせて頂いた、という印象が強い。吉沢さんはぼくをうまく繰ってくれたのである。

最後にお会いしたのは、大岡山の病院にお見舞いした時だった。声はかすれ気味だったが、付添いの御家族がびっくりする程多弁で、お元気だった。

ぼくはもう、ほぼ吉沢さんがアンデスに行かれた時の年齢になったが、吉沢さんの目にはなお子供に見える様で、その時も親しみ深く、まだお前は子供みたいだから、などというお話もされたりして、大変恐縮した。

アンデス遠征の話が持ち上がった時、吉沢さんは果敢にも職を抛ち実現のため砕身の努力をされ隊を率いたのであるが、その後も、連綿として世界の登山界の交流や山岳研究に献身的活動をされ、御自身もK2へ足を運ぶなど、エネルギッシュな活躍をされたことは衆知のとおりである。事につけ、アンデスは人生の転機だったとご発言されているが、その重要な局面から親しく接し、その後の業績もいろいろな形で逐一知るところだったから、ぼくにとって吉沢さんの存在は、初対面の時の畏敬に増して大きく、年を経た今、やはりぼくはまだ子供のようなものだと痛感するし、これから吉沢さんのようなエネルギーはとても湧き起こりそうにもないし能力もない、と脱帽するばかりである。唯一残るのは、若かったぼくにとっても、アンデスは人生の転機だったことで、これはまったく強烈にそうなのであり、今迄の人生はすべてそこから始まったようなものと云ってもいい位だ。

アンデス以降の吉沢さんとの交流は、折につけアンデスの時の隊員打ちそろってお宅を訪ねたり、日本山岳会や針葉樹会の会合でお話しをする機会があったり、三十余年の間様々なチャンスに、いつも変わらぬ初期の頃の間柄のまま続けられた。人の関係は、出会いの時に決まるともう変わらないのであって、ぼくはいつも生徒だったり息子だったりして、それがいかにも自然な当たり前の形で心地良く、限りなく親しみ深いがぶっきら棒な警咳に接することが、繰り返されてきたのだった。

その長い交流の中でも、ぼくにとって最も印象的で強く記憶に残るものは、アンデス遠征を終えた直後の五、六年間、次の海外遠征の計画を画策していた頃の触れ合い――というか当方からの一方的な押しかけ接触――だった。

その頃、吉沢さんは日本団体生命に再び勤められることになって、小伝馬町の社屋に居られた。ぼくは良く、昼過ぎから職場をさぼって、会社のある新橋から地下鉄にのって小伝馬町へ出掛けた。吉沢さんは、社報の編集などの事務の

仕事が中心だったから、まずいつも在席されており、気軽に応じて下さり、決まって近くの同じコーヒー店に連れ出すのであった。

ぼくはアンデス以降、就職はしたけれど頭の中にあるのは次の遠征をやりたいということばかりで、話したいことはそのことだけだった。当時の状況は悲観的で、遠征計画は盛り上がらず、ぼくはいつもブツブツとぐちをこぼした。吉沢さんは退屈そうな顔をして、フムフムと聞き、二言三言素っ気なく諭すというのが毎回のことだったかと思う。

次はカラコルム、とぼくらは考えていたが、折りからの印パ紛争で入れなくなり、じゃあパタゴニアがいい、とか紆余曲折の中で随分勉強したが、その頃日本山岳会の『会報』の編集をされたり、ヒンズークシュ会議に関わっておられた吉沢さんには、当時のホットな山岳界の情報から歴史的な記録、地理的事情の類に至るまで、教えてもらったことはいっぱいあった。こうしてぼくは、コーヒー店教室で、癒され、かつ満たされたのである。

その後、長い歳月の経過があり、それはぼくにとって会社生活の新入社員から定年近くに至る様な人生の主要部分であったが、その間、時折お目にかかる機会がある程度ながら、ほぼコンスタントにお話したりする機会は続いて、その時々に応じて何を考えて居るかとか何をしているとか聞かせて頂いてきた。吉沢さんは長い間、いわば世界の登山界の中で活躍され、文献の研究から遠征に参加するなどの実践的行動まで幅広く活動されて来た。普通なら立場は逆であるべきなのだろうが、情けないことにぼくらは聞かされる方でしかなく、ともあれ興味深く拝聴した。それにも増して、吉沢さんは一貫して、他人の批判などは気にせず自ら思う所を思う様に行う、という信念を持たれ、かつ、自著にも書かれている様に「持続的な幅広い好奇心」を常に維持されて非常に勉強されていた。

吉沢さんの説く登山家三位一体論——山を志す者は、考え（あるいは学び）行動し書くことがそろって初めて一人前である——は有名だが、山の勉強で教えられる所は非常に大きく、そのお陰で自分なりの登山観の様なものも持つことがある程度出来るようになったことはともかく、記録し表現するという面でもぼくは吉沢さんから多大な影響を受けた。何しろ、アンデス遠征直後、各自行動記録を提出した時、全員その書き方が如何にお粗末かという酷評を受けたところで、ぼくはまず目を開かせられた。それは、正確な文章表現という面はさることながら、どこでも日常的にメモを取る習慣をもつという、一緒に暮らしながら見せて頂いた基本的姿勢に至るまでの様々な教えであったのだが、時が経って、大分ましになったと思われたらしく、翻訳の仕事や雑誌への寄稿を紹介して頂いたり、まだご自分の書かれた著書や雑誌記事は殆ど欠かさず送って来られ、ぼくは、自ら実践されている行き方をお前もやって見ろ、という吉沢さんの期待を込めたメッセージを痛切に感じて来た。

それなりの努力や気負いもあったが、期待する親に対して大方は不肖の息子である様に、ぼくはとても吉沢さんの域に達することなど出来るはずもなく、言わばその精神は受け継いだと自負するとしても、その本当のところを真似することは能力を超えており、自分なりの亜流的領域の内で教えを守ることで精一杯という所だ。先に引用した「持続的な幅広い好奇心」というものの、「幅」というのは、人それぞれの器量もいうべきもので自ずから差があって、致し方ないものの様に思えるのである。

前にも書いたが、吉沢さんは、他人の言動に左右されず、思う所を貫くという信念を常に変わらず持たれ、安易に妥協されなかった。その真剣さが何と云っても魅力的で、ぼくらが慕って止まない根源的なところだと思うのであるが、そういってもそれを接する人にも押しつけるという所はまったくなく、逆に非常に寛容的な態度で理解されるのであった。初めてお会いした時からいつも怖い人だったが、同時にやさしい

人でもあった。お話しする機会が幾度となくあった中で、言葉の端々に周囲の理解を超える人達に対する奮然とした批判の意見を口にされたりしたこともあったが、同時にその人達の有りようを憐れむという風でもあった。吉沢さんの目からすれば、ぼくなどの存在は普通とは違って、感覚的にいつまでも羽根の中に囲ってやらねばならない雛鳥みたいなものだったろうから、生き方として妥協してしまうところや反抗的な親父批判のような言動があっても、見て見ぬ振りをされるか、ご本心はともかく、相手として言い分を尊重しようというやさしさを示されるのであって、長い間のふれあいの中で激しくぶつかるということは皆無だった。

以前、ぼくら数人でシプトンの自叙伝『未踏の山河』を翻訳したことがあったが、その付録冊子に、吉沢さんが寄稿して下さった。その中に、シプトンは少人数の機動的登山を主張してエベレスト隊の隊長を辞したこと、またシプトンがウィルソン・セイヤーの冒険的エベレスト試登記に煽動的序言を書いていること、などを挙げ、自分はシプトンの評価を下げた、と辛口の批評をされているところがある。ウィルソンのエベレスト行は、当時微妙な情勢であった中国国境をネパール側からヌプ・ラ経由で無断越境し、壮大な大回りをして北面から試登を企てたものであるが、ぼくなどはそれを読んでいたく感心し、その着想の雄大さや行動記録に見られるすさまじい克己心の前には、動機や手段にかかわる問題などは取るに足らないことだろうと、いわばシプトンの見解に強く共感を覚えたのだった。

吉沢さんは、そもそも冒険心とか未知への探求心とか、その精神は人一倍強いものを持たれ、実際に一生それを貫いた人であるのだが、一方、本質的に非常にオーソドックスな考え方をされ、いいかげんのことは許さないし、筋を曲げることは大嫌いだった。

その強い個性が、ともすれば一部の人達から誤解をされたり、利用されるような立場に追い込まれたりするようなことになって残念な思いもしたが、吉沢さんにしてみれば、思う様に進むという所が重要であって、他は意に介しない、ということなのだろう。ぼくだって吉沢さんを悩ませた内の一人であろうから、何も云えないが、長くお付き合いさせて頂いてやっと吉沢イズムを理解し、まあ卒業させてもらえたかな、と思っている。

もう一つ書いておきたいのは、吉沢さんの登山そのものについてである。学生時代以降の一時期に、日本の初期的登山開拓期の一翼を担う活躍をされたことは、自著に記されていてその様子を窺うことが出来るが、東大谷登攀や団衛谷下降、岩菅山冬期登山など、当時の先駆的山行記録はその気概に満ちた様子が記されていて、読んで引きずり込まれる。誰も考えてないことを計画的に実行するという面と、結構刹那的にパッとやってしまうところとが混然としてあって興味深いが、やっていることは大胆で冒険的とも云えるのではないか。

後輩のわれわれのやって来たことは、それと比較すれば、時代の進歩を取り除くとレベルが低いこともあろうが、結構慎重にやっている。だらしない後輩だと云われそうだが、吉沢さん、無理をするな、とかぼくらに云う資格はありませんよ、と云いたい。しかし振り返って見ると、ぼくらにとって大先輩の吉沢さんは、本質的に、うるさい先輩では決してなくて、けしかける先輩であったのであり、それも口うるさく言葉で表現されるのでなく、身をもって行動して範を示して下さったのだ、とつくづく思うのである。

平成10年度針葉樹会総会議事録

平成10年6月24日午後6時より如水会館武蔵野の間において平成10年度針葉樹会総会が開催された。

出席会員数28名（委任状による出席会員数88名）出席学生数4名

1. 平成9年度活動報告

(1) 懇親山行平成9年9月20、21日（1泊2日）
黒姫・戸隠参加者13名

(2) 会合
(a) 幹事会 平成9年6月11日
(b) 評議会 平成9年6月18日
(c) 総会 平成9年6月25日
(d) 新年会 平成10年1月23日

(3) 出版物
(a) 針葉樹会報第84号 平成9年7月
(b) 針葉樹会報第85号 平成10年5月

2. 平成10年度活動予定

(1) 懇親山行
平成10年9月ころ 懇親山行（山域未定）
平成11年3月ころ スキー懇親山行（山域未定）

(2) 会合
(a) 幹事会 平成10年6月8日
(b) 評議会 平成10年6月18日
(c) 総会 平成10年6月24日
(d) 忘年会または新年会
平成10年12月
または平成11年1月

(3) 出版物
会報
平成10年8月ころ 第86号 発行予定
平成11年1月ころ 第87号 発行予定
平成11年6月ころ 第88号 発行予定

3. 会長、副会長、評議員、幹事改選の件

以下のとおり、可決された。

(1) 会長、副会長
会長 石原 脩（留任）
副会長 高崎 治郎（留任）

(2) 評議員 卒業年度
松下 順吉 S19（留任）
小林 茂雄（議長）S19（留任）
樋口 洪 S22（留任）
石井左右平 S23（留任）
山本健一郎 S32（留任）
中村 保 S33（留任）
市畑 進 S33（新任）
中島 寛 S36（留任）
高橋 信成 S38（留任）
小野 肇 S40（留任）
中村 雅明 S43（留任）
井草 長雄 S48（留任）
藤本 敏行 S51（留任）
中西 茂 S55（留任）
白石 章治 S61（留任）
↑田中一雄

(3)
幹事（平成10年度）
代表幹事 佐藤 活朗（新任）
↑西牟田伸一
総務幹事 古田 茂（留任）
会計幹事 田形 祐樹（留任）
会報幹事 中村 保（留任）
倉知 敬（新任）
↑井草長雄
遠藤 晶土（新任）
↑稲毛尚之
外池 武司（新任）
山行幹事 近藤 泰（留任）

丸山　則二（新任）
↑古瀬泰介

学生幹事　古瀬　泰介（留任）
井上　裕之（新任）

↑渕沢貴子

保険幹事　岡部　晃和（留任）
部室再建（新設）
西牟田伸一（新任）

(4) 監　事（平成10年度）
渡辺　嘉佑（留任）
中村　雅明（留任）

(5) 新入会員
大谷　公重（東洋信託銀行三鷹支店勤務）

4. 平成9年度決算報告及び平成10年度予算（含む遭難対策基金収支）

別紙の通り、承認された。

なお、会員の年齢構成などの変化に伴い会費収入が低迷しており、評議会及び総会において会費の改定案も検討されたが、結論として新年度いっそうの会費回収に努力した上であらためて検討することになった。

5. 平成9年度一橋山岳部活動報告及び平成10年度一橋山岳部活動方針

新入部員4名を迎えた。

最近の活動状況は別紙参照。体育会への復帰を検討中。

6. 平成9年度一橋山岳部決算報告及び平成10年度一橋山岳部予算

別紙の通り、承認された。

7. 部室再建問題の件

山岳部国立部室（山小屋）の老朽化に鑑み、西牟田（S48）を専任幹事として、再建案と資金の検討を委任した。

次号会報にご寄稿を！

本年度中（98年7月～99年6月）の会報発行は、会員に広く行き渡る交流の手段が他にはない重要な親睦媒体であることを考え、少なくとも本号も含め3冊は刊行したいと思いますが、予算を充分振り当ててもらえないため（他にもっと重要な予算の使い途が一体あるのだろうか！）、次号からは会報の体裁の簡素化を試みるとともに、本来の目的たる親睦を重視した編集――幅広い寄稿を募り、消息・会合などの記事を中心とする――とより直近の情報提供を心掛けたいと考えています。

つきましては、次の要領で多くの会員のご寄稿を募りたく、よろしくご協力をお願い致します。

①募集稿のテーマ
・今年の夏休みの過ごし方
・最近の健康維持対策
・登山に次ぐ第二の趣味の凝り方
・身近な会員（例えば同期会）の間の交流（会合幹事の方よろしく！）
・私にとっての針葉樹会

②刊行スケジュール
・原稿締め切り　10月中旬
・発行予定　12月下旬／来年1月上旬

③原稿執筆要領
・四百字詰め原稿2枚（八〇〇字）程度（ちょうど会報の半ページ分に相当します）
・ワープロ打ち原稿、Eメール原稿でも結構です。
・送り先＝
本誌巻頭に表記した編集代表・中村保宛てにお送りください。
ただしEメールはge7183@i.bekkoame.ne.jpまでお送りください。

（会報編集委員会）

一般会計平成9年度決算
（平成9年6月1日～平成10年5月31日）

	支出			収入	
項目	金額	（予算額）	項目	金額	（予算額）
会報発行費	612,149	400,000	納入会費	681,284	700,000
通信連絡費	63,910	80,000	雑収入	0	2,000
総務諸雑費	23,000	60,000	前年度繰越	108,468	108,468
学生保険補助	32,000	40,000			
山岳部補助	140,000	140,000			
次年度繰越	-81,307	90,468			
合計	789,752	810,468	合計	789,752	810,468

一般会計平成10年度予算
（平成10年6月1日～平成11年5月31日）

	支出		収入
項目	金額	項目	金額
会報発行費	300,000	納入会費	800,000
通信連絡費	70,000	雑収入	2,000
総務諸雑費	60,000	前年度繰越	-81,307
学生保険補助	48,000	山岳部特別補助	100,000
山岳部補助	240,000		
名簿発行費	100,000		
次年度繰越	2,693		
合計	820,693	合計	820,693

（参考資料　）
一般会計納入会費長期滞納者
（5年以上・カッコ内は総会員数）

	滞納者	総会員数
S23～S26	3	11
S27～S30	1	17
S31～S34	8	36
S35～S38	4	28
S39～S42	6	21
S43～S46	3	7
S47～S50	2	6
S51～S54	2	11
S55～S58	3	8
S59～S62	2	8
S63～H3	2	7
H4～	0	7
合計	36	167

遭難対策基金平成9年度決算
（平成9年6月1日～平成10年5月31日）

	支出			収入	
項目	金額	（予算）	項目	金額	（予算）
学生保険補助	32,000	40,000	前年度基金有高	6,375,261	6,345,261
			うち遭対基金	5,375,261	5,345,261
基金残高	6,406,783	6,380,261	うち遠征基金	1,000,000	1,000,000
うち遭対基金	5,406,783	5,380,261			
うち遠征基金	1,000,000	1,000,000	利息等	31,522	35,000
			学生保険補助	32,000	40,000
合計	6,438,783	6,420,261	合計	6,438,783	6,420,261

遭難対策基金平成10年度予算
（平成10年6月1日～平成11年5月31日）

	支出		収入
項目	金額	項目	金額
学生保険補助	48,000	前年度基金有高	6,406,783
＊山岳部特別補助	100,000	うち遭対基金	5,406,783
基金残高	6,338,783	うち遠征基金	1,000,000
うち遭対基金	5,338,783		
うち遠征基金	1,000,000	利息等	32,000
		学生保険補助	48,000
合計	6,486,783	合計	6,486,783

＊山岳部特別補助は、ビーコン購入のため、一般会計に入れる。

（参考資料　）

一般会計単年度納入会費総額（予定）	
平成9年度	843,000
平成10年度	799,000
平成11年度	775,000
平成12年度	762,000
平成13年度	738,000

編集後記

まとめが終わって肩の荷がおりました。ひと息ついて安堵感に浸っているところです。吉沢さんは私にとって、それほど大きな存在でした。振り返ってみると、私はお釈迦様の掌の上で踊っていた孫悟空でした。

「（アンデス遠征を仕掛けた）あなたの旦那が私の運命を変えた…」一九七七年十月、K2登頂成功のあと、日本山岳会の代表として、メキシコ市で催されたアルピニストの国際行事に出席し、帰途メキシコ空港で、見送りに行った私の家内にそう話したことでした。アンデス遠征は隊長のみならず隊員に、多かれ少なかれ、それぞれの人生航路に影響を及ぼしました。

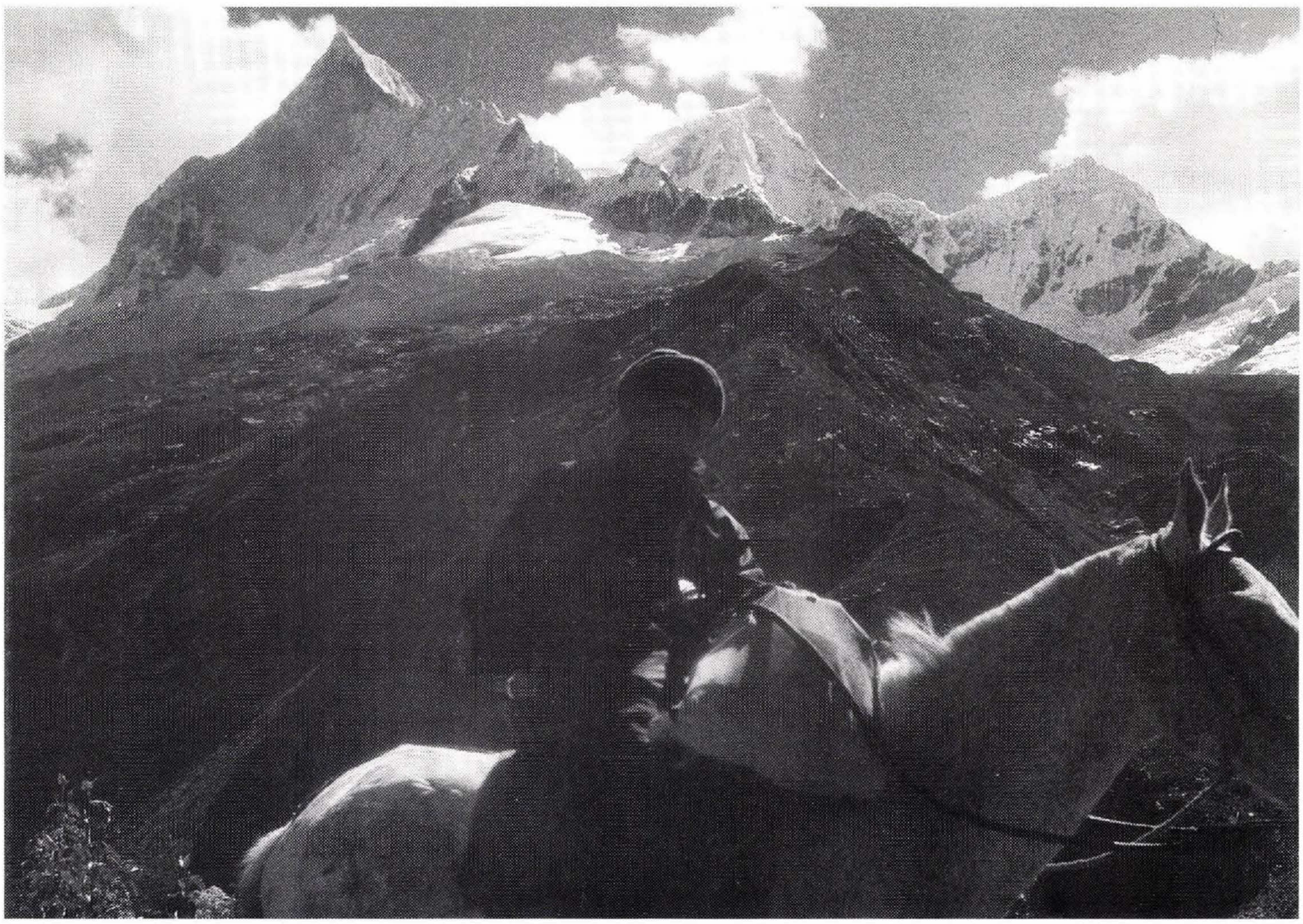
今回の編集では、針葉樹会報としては異例のことですが、会員外の方にも幅広く投稿をお願いしました。皆様たいへん快くお引き受けくださり、針葉樹会会員有志ならびに、ご遺族の心うつ追悼文とあいまって、追悼号にふさわしい厚みのある内容になり、吉沢さんの登山界での活動・業績を立体的に投影することができました。ヒマラヤとカラコルム・ヒンズークシュの地域研究を通じて、指導力の発揮、さらに海外との積極的な交流は吉沢さん個人の志と力倆がしからしめたことです。私を含め多くの針葉樹会員が知らなかった吉沢さんの実像を描くことができたと思います。

吉沢さんは長寿をまっとうされるまで、旺盛な知的好奇心に衰えをみせませんでした。登山や探検のみの狭い視野にとどまらず、古今東西、森羅万象に関心を持ち続けました。登り、読み、書く事を実践した最後の古典的な登山家と言えるかもしれません。

「生涯現役」。吉沢さんのためにある言葉のような気がします。

彼の地でも現役で頑張って下さい。合掌

（中村　保　昭33）



アンデスの吉沢さん

いずれも1961年アンデス遠征中撮影のもの

写真上＝ペルーアンデスのコルディエラ・ブランカ山群プカヒルカ北峰をめざすキャラバンの途上、ヤンガヌコ峠付近で。背景はワンドイ峰。

中＝プカヒルカ登頂成功後、リマ在住の一橋OB、ペルー三菱商事社長・塩川氏宅で行われた祝賀会で。

下＝ボリビアアンデスへ転進後、最後の踏査地域ププヤ山群のベースキャンプで。